

國語 卷十

改訂版

375.9
Iw1
資料室

41981

教科書文庫

4
8/0
41-1937
200030
2228

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

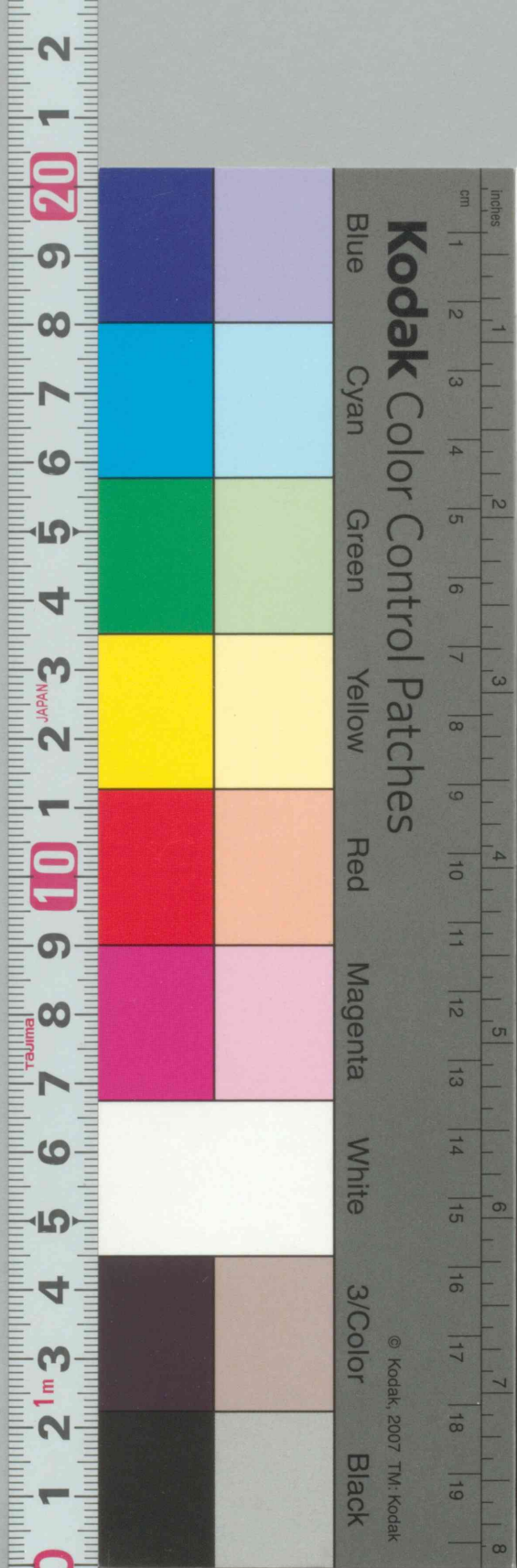


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



日一十二月二十年二十和昭
濟定檢省部文
用科文漢語國校學中

國

語

岩波書店刊

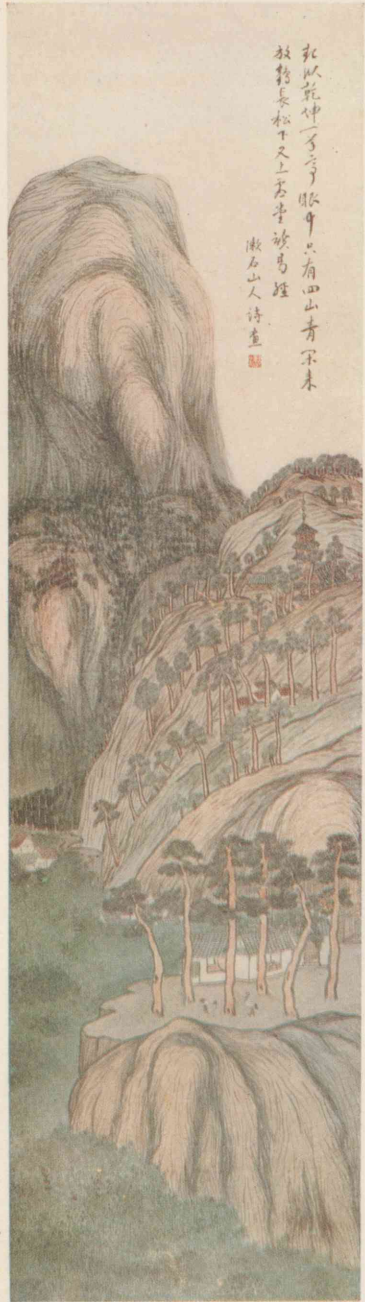
岩波編輯部編

改訂版

資料室

375.9
Iw 1

閑來放鶴



秋以乾坤一色予眼中只有四山青翠未
 放鶴長松下又上蒼苔破馬埕
 漱石山人詩畫

夏目漱石筆

廣島大學
 圖書印



國語 卷十 目次

一 制作の方法	小泉八雲	一
二 近世の文學	藤村 作	三
三 馬追三吉	近松門左衛門	二〇
四 大晦日	井原西鶴	三
五 幻住庵の記	松尾芭蕉	六
六 俳文二篇	横井也有	四
奈良團の贊		四

蓼花巷の記

七	みとり日記	小林一茶	四
八	物學び	本居宣長	五
九	月の前	上田秋成	六
一〇	芳流閣	瀧澤馬琴	七
一一	鹽原	尾崎紅葉	八
一二	五重塔	幸田露伴	九
一三	一夕觀	北村透谷	一〇
一四	自然主義の文學	島村抱月	一一
一五	肯定觀の文學	岩城準太郎	一二

一六	秋露	夏目漱石	一三
一七	高瀬舟	森鷗外	一四
一八	國文學の精神	久松潜一	一五
一九	愚禿親鸞	西田幾多郎	一六
二〇	生涯稽古		一七



小泉八雲
ラフカヂオ、
ハーン
文學者
東京帝國大學
講師
イギリス人
後日本に歸化
明治三十七年
歿 年五十五

國語 卷十

一 制作の方法

小泉 八雲

制作の方法を考へるに當つて、諸君は、私が文學を情緒表現の藝術として定義するものであることを忘れてはならない。一體、情緒とは如何なるものであるか。その價值、その性質は如何。又、それは如何にして捕捉することが出来るか。情緒といへば、諸君は恐らく、涙、悲哀、後悔の類を思ひうかべるであらう。しかし、これは私のいふ情緒ではない。我々は先づ極めて簡単な種類の情緒——一本の木に對する情緒に

ついで考察することから始めよう。

諸君が一本の木を眺める時、諸君の内部には二つの事象が生起する。第一には、視覚を通して脳裡に投影された木の影像——即ちその木の小さい寫眞が出来る。これがその木の與へる感覺であるが、しかし、この影像は言葉で描寫しようとしても不可能であり、よし又出來たにした所で、それは殆ど藝術的價値のないものであらう。しかし、これと殆ど同時に、諸君はこの第一の印象とは性質の異なる、第二の印象を受ける。諸君は、その木が諸君にある種の特異な感情を與へることに氣がつく。これは、その木に一定の性格があつて、それを諸君が知覺するからである。この性格の知覺がその木に對する感情もしくは情緒であつて、これこそ藝術家の求め、詩人の求

める所のものである。

總べて事物は、生物でも無生物でも、それを見る人の心にある感情を起させるものであつて、この意味に於て、總べての事物には「顔」があるともいはれよう。諸君が初對面の人に逢つてその顔を見る時、まづ受けるものは感覺的印象であるが、直ぐそれについて一種の感情が起つて來る。即ち、その顔を好むか好まないか、或は比較的無關心でゐられるかである。かういふことは、人間の顔に關しては何人も經驗する所であるが、藝術家や詩人は事物に關してもこれを經驗する。即ち藝術家や詩人が他の人々と異なる所は、彼等は所謂事物の「顔」、即ちその性格を知覺する點にある。木でも山でも家でも、石でさへも、藝術家の眼から見れば「顔」があり、性格がある。我々

も適當な方法によつて修練を續けて行く時は、かくの如き事物の性格を認識し得るに至るものである。

これで、私の所謂情緒、即ち作者の把捉し表現せんとする感情或は情緒の如何なるものであるかは、ほゞ明瞭になつたことと思ふ。我々はこの上なく簡単な標本、即ち一本の木に對する情緒について考察した。しかしながら、文學に於て取扱はれる一切の事物、一切の想像、一切の存在は、嚴密にこれと同じ方法で考へられなければならない。かくて如何なる場合にも、作者の目的はその物の性格を把握し決定することであつて、彼はその物が彼の心に惹起した感情を如實に表現することによつてのみ、これを成就することが出来る。これが文學の主要な任務であるが、同時に又極めて困難な作業である。

感情の起る時はどんな現象が現れるか。諸君は、喜か苦しみか、恐か驚かの、瞬間的な悸きを感じず。しかしこの悸きは、突如として來た如く、突如として去る。それが消え去ると同時に敏速に、それを書き留めることは出来ない。その時諸君の心に残つてゐるのは、その物の感覺即ち第一印象と、感情の單なる記憶とに過ぎない。人の性質の異なるに隨つて感情の動き方にも相違があるから、ある性質の人々には感情が比較的長く残ることはあらう。が、何れにせよ、それは立昇る煙の如く、風に漂ふ香の如く、果敢なく消え去るものである。諸君がもし、この感情が起るや否や、如實にそれを紙上に寫し得る人があると思つたら、それは大なる誤であつて、これは烈しい勞作によつて始めて成し遂げられるものである。その勞

作とは一旦受けた感情を再生させることである。

感情を再生させようとする時、初め諸君は、眠から醒めて夢を思ひ出さうとする人と同じ状態にあるであらう。夢を思ひ出すことが如何にむづかしいかは、お互に知る如くである。しかし、その時受けた感覺的印象の助によつて、感情が再生することがある。私が切に勧めたいのは、さういふ際、直ちに筆を執つて、出来るだけ詳しくその感情の由つて來た事情及び原因を書き留め、出来るだけ詳しくその感情を寫して置くことである。さういふ際には、文法的に正しくあらうとあるまいと、文章になつてゐようとみまいと、或は順に書かうと逆に書かうと、問ふ所ではない。要はその經驗の覺書を作るにある。この覺書は、やがてそれから植物を育て花を開かせるべき種子である。

この速成の覺書を読み返して見ると、それによつて、或はその中のある部分によつて、微かながらも感情が再生するのを感じることがある。しかし、勿論それは記録者にとつてのみのこと、他人に對しては未だ何の價值もないものである。

次の仕事は、この覺書を發展させ、それに自然の順序を與へて、正しい方法で文章を構成することである。こんな事をしつてゐる間に、先に覺書を作つた時には忘れてゐた數々の事實が心に蘇つて來る。かくして展開された成果は、もとの四五倍乃至十倍にも達することがある。が、さてそれを讀み返して見ると、感情は再生するどころか、跡方もなく消失して、いかにも平凡なものになつてゐる。三度目の稿に於ても、語句や

思想は整つて来るであらうが、やはり感情は再生してゐない。四度、五度と書き直してゐるうちに、驚くべく多くの變化が生じて来る。何となれば、我々はこの勞多き作業に従事してゐる間に、必ずや既に書いた事柄の多くは實は不要であり、最も必要な事柄は未だ少しも適當な展開を得てゐないことに氣がつくからである。かくて、始めて我々に、我々の眞に書かうとしてゐるものが何であるかがはつきりと見えて来るのであつて、こゝに至つて全體が形を變へ、一層緊密に、一層力強く、一層單純になつて来る。そして最後に、喜ばしいことには、感情が再生して来る、——それどころではなく、新しい心理的關係を得て、最初經驗した時よりも豊にされ、一層有力に再生して来る。諸君は諸君の書いたものの美しさに驚歎を禁じ得

ないであらう。しかし、諸君はまだその時の感情を信じてしまつてはならない。それを即時印刷に附する代りに、机の抽出に入れて、少くとも一箇月はそれを見ずに置くがよい。それだけ經過してから讀み返して見ると、きつと諸君は、なほ一層それをよくすることができ、それを發見するであらう。その上更に一二の修正を施せば、恐らくそれは諸君の全力をこめた最上の作品になるであらう。そして、それは、諸君がその事實なりその物なりを始めて知覺した時に諸君自らが感じたと同じ情緒を、他人に感じさせるであらう。この過程は、望遠鏡の焦點を合はせる過程と非常によく似てゐる。遠方にある對象を最もはつきり見ようとするには、その筒を幾度も引出したり引込めたりしなくてはならない。

文學者は、觀光者が望遠鏡を以てする所を、言語を以てしなくてはならない。これは如何なる種類の文學制作にあつても、第一に肝要な事である。勞苦は勞苦である。が、逃れる道は斷じてない。長い間の修練もこの勞力をいさゝかも輕減しはしない。その方法は非常に熟練して來るであらう、しかし、仕事の總量には殆ど變りがない。

思ふに、諸君のうちには、數週間或は數日で一篇を書き上げ、しかもそれが定期刊行物に發表されるや、幾千の讀者を感動させ、多くの人に感激の涙を流させることの出来るやうな作者もあるであらう。私はそれが公衆を喜ばせ、彼等の情緒を動かし、彼等の最も善い情操を鼓舞するであらうことをも疑はない。そして、さうすることが文學の任務であると、嘗ては

私もいつた。しかし、もし諸君にこの作品を私が文學といふかと聞かれたら、私は「否、それはジャーナリズムである。短時間、随つて不完全に書きなぐられたものであつて、文學の鑛石ではあり得ても、眞の意味の文學ではない」と答へる。諸君は或はいふであらう、「公衆はそれを文學と呼び、文學として扱つてくれる。——それ以上に何を要求するのか」と。

安價な文學は當座は却つて割がよく、眞の文學は全く割に合はない。しかし、偉大な作家によつて書かれたすぐれた作品は、諸君がそれを繰返して讀む度毎に美しさを増して來る。そして、幾代に亙り幾世紀に亙つて、これを讀む人々に對して彌、益、その美を發揮してゆく。しかるに安價な文學は、最初の一讀にはかういふ傑作よりも却つて面白いこともあるが、二

度目には缺點が見え始め、三度、四度と読み返すに随つて益、それが目について来て、そのために讀者は全く興味をそがれ、遂には嫌惡の餘りそれを投げ出すに至るであらう。一般公衆は、長い間にこれと同様のことを行つてゐるのである。彼等は今日愛讀してゐるものを明日は投げすてて顧みない。そしてそれが正當である。何故ならば、それは丹精を凝らした作ではないのだから。

總べて一般的説明には多少の除外例のあることは免れ難いが、大體に於て、何れの國語に於ても、古典とよばれるものは必ず完全な仕上げを示してゐるものであるといつても過言ではないと信ずる。

(人生と文學)

藤村作

國文學者
文學博士
東京帝國大學
名譽教授
福岡縣の人
明治八年生

二 近世の文學

藤村 作

凡そ道德習慣といふものは、その成立つた當時に於ては、人間の社會生活を圓滑にするものであつたであらう、人々相互の生活を侵すことなく、互に相助ける上に役立つものであつたらうが、これは固定し易く、一旦定まれば容易に變らぬものである。尤も、時代が推移し生活が變化すると共に變つてゆくものもあつて、徳川時代の武士道の如きはその一例であるが、一般的にいへば、道德習慣は固定し易いものである。然るに、人生そのものは絶えずその自然の道を流れて行かうとし、この流れの爲には、固定した道德習慣は、とかく堤防の如くその自由の進行を拘束しようとする。こゝに水と堤防との間

に葛藤が生じ、衝突が生ずる。所謂義理と人情との葛藤衝突はこれである。この衝突が、たゞ流れる水を多少阻んで、眞直に行くのを少し屈折させて流す程度であれば、別に大した問題ではないが、阻止の程度がやゝ強くなつて、流れが渦紋を成すやうになれば、そこに人生のやゝ著しい事件を生ずる。更に流れようとする水を全然堤防が妨げるに至れば、水と堤防との衝突の勢は、單に渦紋を畫ぐ程度には止らない。堤防を切つて流れるか、溢れてそれを越えるか、或は、殆ど流れが阻止されてしまふかであつて、多くの場合、こゝに人生の悲劇的事件を生むのである。

かゝる現象は、人類の社會生活に於ては、殆ど永久に避くべからざるもののやうである。現に今日でもこの葛藤衝突の

悩みは、多かれ少かれ、殆どすべての人の上に存するのである。特に徳川時代の武士生活に於ては、階級的秩序の過度の尊重の爲に機械化された主従關係があり、それから生まれた生活の固定、形式化があつた爲に、この衝突の悲劇は最も起り易かつたのである。

徳川文學の大多數——歌舞伎・浄瑠璃讀本などが、義理・人情の衝突に著想を得てゐるのは、かゝる武士生活の實際に觸れたものであらう。文學に現れたこの衝突の悲劇は、主従關係や家族關係の間に起るものが最も多い。それを具體的に現したものは、自殺出家・討死・身替りといふやうなものである。歌舞伎・浄瑠璃の多數は、かゝる悲劇的事件の幾つかを組み合はせ、それに性質の違つた事件を織り交せて出来たものであ

るといつても過言ではないであらう。

近世の文學は、かく義理と人情との衝突に著想を得てゐるが、これを取扱つた態度はどうであるかといふに、この衝突が人生悲劇の原因となる事實を指摘すると同時に、その事件の中にある人々に相應の同情を持つて取扱つてゐる。決して冷然とこの事實を眺めたものでもなく、又茶化し去つたものでもない。併し又一步進んで、この悲劇の原因を取去つて、積極的に人生を救ふといふやうな理想的な態度を以て取扱つた所も見えない。それは結局社會組織の改造となることであるから、思想的に固定し切つた當時の人達には、夢にも考へ及ばなかつた所であらう。彼等は又妥協の道にも安んじ得なかつたから、結局文藝は皆一様に、自分を棄てて主君に盡く

す義理の精神を主題として、その健げさ、高さ、美しさに讚美の聲を揚げてゐる。いひかへれば、社會の規範に隨從する時代精神を高調してゐる。

近世の人々は斯ういふ態度を以て義理・人情の衝突事件に臨んでゐる。即ち人情を三文の値もないものとして斥けて、義理を獨り人生の大事とするのではなくて、人情の清さ、美しさ、切なさを認めつゝ、しかも、義理の精神をそれよりも一層大きく、高く、尊いものとしてゐる。即ち彼等の態度からすれば、義理の敵として人情を認めてゐるのではなく、義理と人情とを兩立させることを人生の理想とするが、それが實際に於て不可能である場合、已むを得ず、人情を犠牲にして義理を完うしようとするのである。

馬琴
瀧澤馬琴
名は解
讀本・草雙紙
作者
江戸の人
嘉永元年（二
五〇八）歿
年八十二

馬琴などになると、この人情を侮蔑し、義理のみを重く見るやうな態度を取るから、その描出した人生は甚だしく偏頗な片端なものとなつて、人物が人間らしさを失つてゐるけれども、多くの作家はさうではない。義理を尊重すると共に人情をも遜視してゐないから、よし義理の精神が主題となつてゐても、描いた人生には温かみもあればふくらみもあり、人物も人間らしくて、機械でもなければ死物でもないのである。巧拙はともあれ、彼等の著眼はそこにあつたのである。

義理・人情の葛藤若しくは衝突を取扱つて、兩者を並立させるにせよ、又人情を抑へて義理を立てるにせよ、そこに作者が最も高調した所のものは義理の精神である、時代の一理想であつた義理に殉ずる精神である。そして、主要な人物はこの

精神の具體化したものに他ならぬのである。多くの場合、義理と衝突する人情は、それ自身の美しき強さを表すと共に、その美しき強き光によつて、一層義理の精神の光彩を増してゐる。具體的にいへば、武士階級の男女が、一命を棄て、恩愛の情を絶つて、何の未練げもなく、主君の爲、親の爲、夫の爲に犠牲となる、あの悲壯な態度は、よし現代社會から見て、淺はかな點があらうと、精神そのものは尊ぶべきものとして我々の眼にも映るのである。否、そこには時代を異にした我々をも深く感動させるものがあるのである。徳川時代の時代物を見聞き、讀んで我々が感激するのは、一にかくの如き主題とその表現にあるといつてよい。

（近世國文學序説）

近松門左衛門
本名杉森信盛

號は巢林子

淨瑠璃・歌舞

伎狂言作者

京都の人

享保九年(二

三八四)歿

年七十二

三吉

本名與之助

伊達與作の子

五十三次

東海道五十三

次

東海道(江戸

から京都に至

る街道)に設

けられた五十

三の宿驛

打出の濱

現大津市附近

これく御覽ぜ、打たしやんせ。これこそ五十三次を、居ながら歩むひざ、膝栗毛馬、はいしい道中雙六。「南無諸佛分身」と、書いた六字を六角の、骰子は櫻木花の都をまんなかに、思ひ思ひのしるしを置いて、さらばこちから打出の濱。大津へ三里。こゝで矢橋の舟賃が、出舟召せく、旅人の乗りおくれじとどさくさ津。御姫様より先づ姥が餅。一口二口、みな口鱒踊りこえ、坂へ越すのも骰子次第。骰子をふれく、ふるや鈴鹿をあとにさがれば負けまいと、せきに關より龜山に、煙草火打の石薬師。吉田・二川・白須賀ちよいと越えて、新居今切、舟に召せ召せ、蛤召せの、はまぐりく、濱松まで舞坂三里な。のり掛川

三 馬追三吉

近松門左衛門

うつの山
宇津山
現静岡縣安倍
志田兩郡の界
(丸子・岡部兩
宿間)に在る

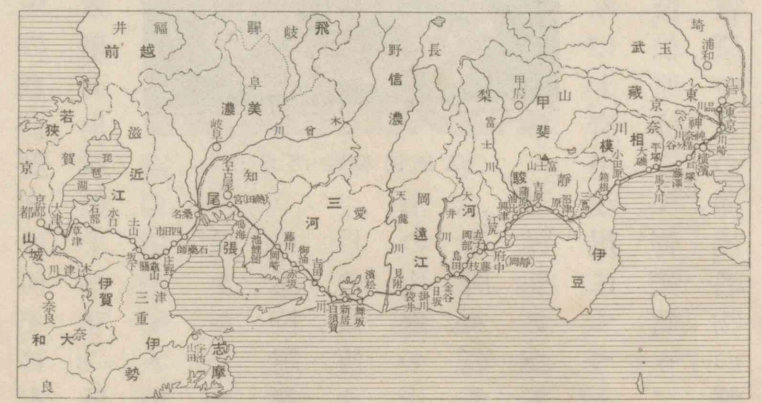
清見寺
現同縣庵原郡
興津町に在る
臨濟宗の名刹



近松門左衛門肖像

を飛びおりて、機嫌笑顔や、さあ日坂の蕨餅、腰なは何ぞ、日本一の大井川。仕合はせよしの旅、雙六里、七里八里もたゞ一足に、さきへくと咲きかゝりたる藤枝、岡部、瀬戸の染飯、うつの山邊の十團子、所々の名物、買うて、おあしつくく、つく手鞠子に、ひいふうみいよ、府中、江尻にすつとんすつとん。とんと打つたる興津波、松原はる、膏薬、買うて、月をすひ出せ清見寺。由井、蒲原や吉原の花、蒲焼、名物の鰻の

膚沼津の宿。三島こゆれば箱根へ三里。骰子の目次第に關こゆる、悪い目うてば手判を取りに、元の京へ立歸る。がつてんか。おのおのみこんだ。小田原外郎大磯平塚藤澤の、さはりもなしに雙六の、さいさきもよし、門出よし、道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷神奈川越え、川崎を越え、品川越え、先づ先駈けのお姫様、一番勝に勝色の、花のお江戸に著き給ふ。一のうらは雙六の、さひはひあり、喜あ

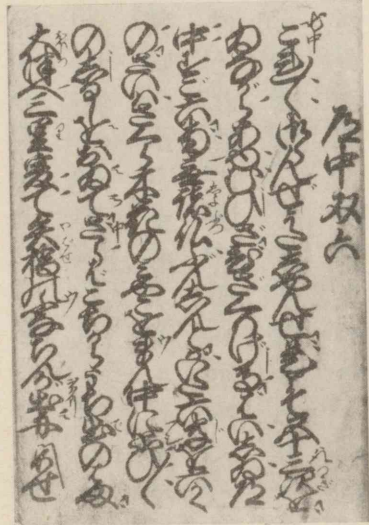


東海道五十三次

姫君
由留木家の息
女しらべの姫

大殿様
しらべの姫の
父

り、慰みありける道中と、どつと興にぞ入り給ふ。お側の衆に囃されて、幼心の姫君、かう面白い東とは、今までおれは知らなんだ。さあ、往かう、はや往かう。「やあ御座らうと、おつしやるか。そりや、めでたいは、めでたいは。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へと立騒ぐ。お乳の人は、勇みをなし、そんなら、ま一度大殿様、お袋



古版浄瑠璃本

様とお杯。これも馬子殿お蔭ぢや。出來いた、出來いた。そちには禮いふ、褒美やる。其處に待ちややとさ、めきわたり、奥に御供し入りにけり。

馬方は、つひに見ぬ金の間を、うそくと覗き廻れど、席のほか踏みも習はぬ備後表、え、この座敷は仰に滑つて歩かれぬ。大名の家よりもこつちの家が結構でござると、獨言して居たりけり。

お乳の人は、大高にお菓子さま、盛り入れ、どれ、三吉其處にか。まあ、そちはけな者ぢや。道中雙六お目にかけ、それ故に姫君様、お江戸へござろと御意なさる。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、有りがたう戴きや。お錢三筋、買ひたい物買ひや。殊にそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢はうといや。見れば見るほどよい子ぢやに、馬方させる親の身は、よく、てあらう」と、いと懇の詞の末、三吉つく、聞きすまし、由留木殿の御

滋野井
伊達與作の妻
三吉の母
由留木殿
丹波國(京都府)の一城主

内、お乳の人の滋野井様とはお前か。それなら己が母様と抱きつけば、あゝこは慮外な。おのれが母様とは。馬方の子は持たぬともぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋りつき、「なんの無いこと申しませう。わしが親はお前の昔の連合、此の御家中にて番頭伊達の與作、其の子は私。此方様の生みの子の與之助はわしぢやはいの。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覚え。杳掛の姥が話には、母様も離別とやらで殿様に御奉公。こなたを姥が養育し、父様に逢はせたら思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋野井様と尋ねよ」と懇に教へて、姥はおれが五つの年、久しう痰を煩うて、擧句に鳥羽の祭に往て、餅が喉に詰つて、つい死んでのけました。在所の衆が養

伊達與作
浪人馬子
元由留木家の
家臣
杳掛
現京都府乙訓
郡大枝村杳掛
鳥羽
現京都市下京
區上鳥羽及び
伏見區下鳥羽

うて、漸う馬を追ひ習ひ、今は近江の石部の馬借ばしやくに奉公します。これ守袋を見さしやんせ。何の嘘を申しませう。お前の子にまぎれはない。外に望は何もない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人一所に居て下され。みごと杳も打ちます。此の草鞋もわしが作つた。晝は馬を追うて、夜は杳打ち草鞋作り、父様、母様養ひませう。父様と一つに居て下され。拜みまする母様と、取りつき、抱きつき、泣き居たり。

お乳ははつと氣も亂れ、見れば見るほど我が子の與之助、守袋も覺えあり。飛びついて懷に抱き入れたく氣はせけども、あつあ大事の御奉公、養ひ君のお名の疵、偽つて叱らうか。いやかはいげに、さうもなるまい。まあちよつと抱きたい。ああどうせうと、百千色の憂き涙、雙つの眼には保ちかね、咽び沈

んで居たりしが、いや／＼我が子ながらもさかしい者、偽つて實まこととせず、母を心の穢きたい者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと、涙のごうて氣を鎮め、「こゝへ來い、與之助」と引き寄せて兩手を取り、さても大きなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしう、なぜ尋常にも育たぬぞ。顔の道具、手足まで、母はかうは産みつけぬ。美しい黒髪を此のやうに剃り下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ」とさめ／＼と泣きけるが、これ物を合點しや。たしかに産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。淺ましう成りさがつたを嫌うていふでは更々ない。この譯をよう聞きやや。母はもと御前様の御奉公人、與作殿は奥小姓、殿様の御慈悲にて夫婦になされ、與作殿は段々に奏

者役、番頭、千三百石までお取立て、追腹ほどの御恩の家。其の間にそなたを設け、上には姫様御誕生。御内證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に、二番と下座にはさがらぬ人。情なや父様が江戸詰に、大事のところを仕損ひ、切腹にきはまつた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其のまゝ残さうため、父様の命助かり、奉公構ひの御改易。其の時母も一緒に退けば、尤も夫婦の道は立つ。『お姫様の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれ』と父様のことわり故、第一は夫のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼うても

御勘氣の末氣遣な。與作が子とばしいやんなや。さあ早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生まれ性、現在我が子に馬追させ、夫の行方も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、これが何になることと、聲を忍びに泣くばかり。

子は生まれつき賢くて、聞分けあるほどに尙泣き入り、悲しい話を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟のことなれば、母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかしといへば、ちやつと口を押さへ、あゝ、あゝ、物體ない。其の乳兄弟いはぬこと。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體。三吉といふ馬追が乳兄弟にあ

蟻の穴から云々
千丈之堤以
蟻之穴潰
(韓非子)

るなどと、どう妨にならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。輕いやうで重いこと。ひそく／＼いうて人も聞く。先づ早う出てくれと泣く／＼いへば、あゝ母様、あんまり遠慮過ぎました。先づいうて見て下され。」まだいひ居るか、聞分けない。夫のこと、我が子のこと、母に如才があるものか。合點のわるい、聞分けないと制する内に、奥よりも、お乳の人はどこにぞ。御前から召しますと呼ばはれば、あれ聞きや。人が来る。出てたもと、手を取つて引き出す。

不便や三吉しく／＼涙、頬冠りして目を隠し、杳見まつべて腰に付け、見すぼらしげな後姿、こりや、ま一度こちら向きや。山川で怪我しやんな。雨風、雪降、夜道には、腹が痛いと作病起し、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしてたも。毒な物食は

ず、腹や麻疹の用心しや。可愛のなりや、いた／＼しや。千三百石の代取が何の罰ぞ、咎めぞ」と、式臺の段箱に身を投げ伏して歎きしが、懐中の有合はせ、一步十三服紗に包み、これたしなみに持つてゐや」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り、恨めしげに、母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。其の一步もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の與作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貫はう筈がない。えゝ胴慾な母様、覺えて居さつしやれ」と、わつと泣き出す其の有様。母は魂消え入りて、養ひ君、お家の御恩思はずば、さて一人子を手離して、何の遣らうぞ。奉公の身のあさましや」と、悶え焦れて歎きける。

時に奥口さゝめいて、早御立ち」と、姫君のお輿、昇きあげ行列

自然生
三吉の神名
坂は照るく
馬子唄
鈴鹿
鈴鹿峠
現滋賀・三重
兩縣の界に在
る鈴鹿山の峠
丹波興作

世話淨瑠璃
寶永五年(一
三六八)成

立て、お乳の人の乗物を平附けにこそ舁き寄せけれ。お乳は
さあらぬ顔つきして、姫君の御伽に最前の馬方を此の乗物に
引附け、お慰みに謠はしや。「畏まつた」と宰領ども、こりや、其處
な自然生^{じぜんせい}め、謠ひ居らうとぎごつなく、やあ此奴はほえをるか。
何ぢや、こりやいまくしと、握拳を二つ三つ、頂きながら泣聲
に、坂は照るく、鈴鹿は曇る、土山あひの、あひの土山雨がふる。
ふる雨よりも親子の涙、中にしぐる、雨宿り。

(丹波興作)

井原西鶴
本名平山藤五
俳人 浮世草
子作者
大阪の人
元禄六年(一
三五三)歿
年五十二

品川
現東京市品川
區の内
神田の明神
神田神社
現同市神田區
宮本町に在る

四大晦日

井原 西鶴

榎搗栗、神の松、やま草の賣聲もせはしく、餅搗く宿の隣に、煤
をも拂はず、二十八日まで髭も剃らず、朱鞘の反をかへして、春
まで待てといふに、是非に待たぬかと、米屋の若い者を睨みつ
けて、直なる今の世を横に渡る男あり。名は原田内助と申し
て、かくれもなき浪人、廣き江戸にさへ住みかね、此の四五年、品
川のあたりに店借りて、朝の薪に事を缺き、夕の油火をも見ず。
これは悲しき年の暮に、女房の兄、半井清庵と申して、神田の明
神の横町に薬師あれば、此の許へ無心の状をつかはしけるに、
度々の事にて迷惑なれども、見捨てがたく、金子十兩包みて、上
書に「貧病の妙薬金用丸、萬づに吉」と記して、内儀の方へ送られ

ける。

内助喜び、日頃別して語る浪人仲間へ、酒一つ盛らんと呼びに遣はし、幸ひ雪の夜の面白さ、今までは崩れ次第の柴の戸を開けて、「さあこれへ」といふ。以上七人の客、いづれも紙子の袖を連れ、時ならぬ一重羽織どこやら昔を忘れず。常の禮儀過ぎてから、亭主罷り出て、「私仕合はせの合力を請けて、思ひのままの正月を仕る」と申せば、各「それはあやかりもの」といふ。「それにつき上書に一作あり」と、件の小判を出せば、「さても輕口なる御事」と見てまはせば、杯も數重なりて、「よい年忘れ、殊に長座」と千秋樂を謳ひ出し、小判も先づ御仕舞ひ候へ」と集むるに、十兩ありしうち一兩足らず。座中居直り、袖などふるひ、前後を見れども、いよ／＼無いに極まりける。

德乘
後藤德乘
名は正家
彫金師
寛永八年（二
二九一）歿
年八十二

あるじの申すは、其のうち一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覺え違ひといふ。「只今までたしか十兩見えしに、めいようの事ぞかし。とかくは銘々の身晴し」と、上座から帶を解けば、其の次も檢めける。三人目にありし男、澁面つくりて物をも言はざりしが、膝立て直し、「浮世にはかゝる難儀もあるものかな。某は身ふるふまでもなし。金子一兩持ち合はすこそ因果なれ。思ひも寄らぬことに一命を棄つる」と、思ひ切つて申せば、一座口を揃へて、「こなたに限らず、あさましき身なればとて、小判一兩持つまじきものにもあらず」と申す。「如何にも此の金子の出所は、私持ち來りたる德乗の小柄、唐物屋十左衛門方へ一兩二歩に昨日賣り候事紛ればなけれども、折節悪し。常々語り合はせたるよしみには、生害に及びし後にて御尋ね遊ば

し、屍の恥をせめては頼むと申しもあへず、革柄に手を懸くる時、小判は是にあり」と丸行燈の陰より投げ出せば、さてはと事を鎮め、ものには念を入れたるがよいといふ時、内證より、内儀聲を立て、小判は此方へ参つたと、重箱の蓋に著けて座敷へ出されける。これは宵に山の芋の煮染物を入れて出されしが、其の湯氣にて取附きけるか、さもあるべし。これでは小判十一兩になりける。何れも申されしは、此の金子、ひたもの數多くなることめでたしといふ。

亭主申すは、九兩の小判、十兩の詮議するに、十一兩になる事座中金子を持ち合はせられ、最前の難儀を救はんために御出しありしは疑ひなし。此の一兩、我が方に納むべきやうなし、御主へ返したし」と聞くに、誰返事のしてもなく、一座異なるもの

になりて、夜更け雞も鳴く時なれども、各立ちかねられしに、此の上は亭主が所存のとほりに遊ばされてたまはれ」と願ひしに、とかくあるじの心任かせに」と申されければ、彼の小判を一升枘に入れて庭の手水鉢の上に置きて、何方にても、此の金子の主取らせられて、御歸りたまはれ」と、御客一人宛立たせまして、一度々々に戸をさしこめて、七人を七度に出して其の後、内助は手燭ともして見るに、誰とも知らず取つて歸りぬ。

あるじ即座の分別、座馴れたる客のしこなし、かれこれ武士の附合格別ぞかし。

(西鶴諸國咄)

西鶴諸國咄
近年諸國咄大
下馬
五卷
浮世草子
貞享二年(一
三四五)刊

松尾芭蕉
名は宗房
蕉風俳諧の祖
伊賀國(三重縣)の人
元祿七年(二三五四)歿
年五十一
幻住庵
現大津市石山國分町に在つた
石山
岩間
共に現同市石山の内
國分山
現石山國分町に在る
光を和らげ云々
和其光(同其塵) (老子)
曲翠子
菅沼曲翠
芭蕉の門人
近江國(滋賀縣)膳所藩士

五 幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流れを渡りて翠微に登ること三曲二百歩にして、八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和らげ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、ものしづかなる傍らに、住み捨てし草の戸あり。蓬根笹、軒をかこみ、屋根洩り壁落ちて、狐狸、ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何がしは勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八とせばかり昔になりて、まさに幻住老人の名をのみ残せり。

奥羽象潟
現秋田縣由利郡象潟町の北に在つた入江
やがて出でじ
吉野山やがて出でじと思ふ
身を花散りなばと人や待つらむ (西行)
吳楚東南に云々
昔開洞庭水
今上岳陽樓
吳楚東南拆
乾坤日夜浮
(杜甫)
瀟湘
湘江
現中華民國湖南省を流れる洞庭湖
洞庭湖
現同省の北部に在る
比叡の山
現京都府と滋賀縣との界に在る

予また市中を去ること十とせばかりにして、五十年や、ちかき身は、叢蟲の叢を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面を焦し、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を傷りて、今年湖水の波にたゞよふ鳩の浮巢の流れとゞまるべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。

さすがに春の名残も遠からず、躑躅咲き残り、山藤松にかゝりて、郭公しばゝ、過ぐるほど、宿かし鳥のたよりさへあるを、啄木鳥のつゝくともいとほじなどそゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申に峙ち、人家よきほどに隔たり、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。比叡

比良の高嶺
 現滋賀縣滋賀郡に在る
 辛崎の松
 現同郡下坂本村に在つた
 笠取
 現京都府宇治郡笠取村に在る
 三上山
 現滋賀縣野洲郡に在る
 田上山
 現同縣栗太郡に在る
 かの海棠に云々
 徐老海棠集上
 王翁主簿集上
 (山谷集)
 とく／＼の雫
 とく／＼ととつる岩間の苔
 清水汲みほす
 ほどもなきすまひかな
 (傳西行)

の山、比良の高嶺より辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たる、舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞のたゞく音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は土峯の梯に通ひて、武藏野の古きすみかも思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。なほ眺望くまなからんと、うしろの峯にはひのぼり、松の棚つくり藁の圓座を敷いて、猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなみ、主簿峯に庵をむすべる王翁、徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となりて、辱顔に足を投げ出し、空山に虱をひねつて坐す。たま／＼心まめなる時は、谷の清水を汲みてみづから炊ぐ。とく／＼の雫をわびて、一爐の備いと輕し。はた、昔住みけん人の殊に心高く住みなし侍りて、たくみおける物ずきもなし。

筑紫高良山
 現福岡縣三井郡御井町に在る
 山中に天台宗の名刹御井寺が在つた
 僧正
 寂源僧正
 御井寺の座主
 元祿九年(二三五六)歿
 年六十七
 加茂
 現京都市に在る官幣大社賀茂別雷神社と賀茂御祖神社
 甲斐何がし
 藤木甲斐守敦直
 江戸時代初期の書家
 木曾
 現長野縣西筑摩郡の内
 越
 北陸道の古稱

持佛一間を隔てて、夜の物をさむべき所などいさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが子にて、このたび洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いと易々と筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、させる器たぐはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱にかけたり。晝はまれ／＼訪ふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里のをのこども入り來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、我が聞きしらぬ農談に日既に山の端にかゝれば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴なひ、燈を取りては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさ

樂天

白樂天
名は居易

支那唐代の詩人

皇紀一五〇六年歿

老杜

杜甫

字は子美

唐代の大詩人

皇紀一四三〇年歿

猿蓑集

六卷

俳諧集

元祿四年(二
三五二)刊

んとにはあらず。や、病身人に倦みて世を厭ひし人に似たり。つらく年月の移り來し拙き身の科を思ふに、或時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。樂天は五臓の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみかならずやと思ひ捨ててふしぬ。

まづたのむ椎の木もあり夏木立

(猿蓑集)

横井也有

名は時般

俳人

尾張國(愛知縣)名古屋藩士

天明三年(二

四四三)歿

年八十二

多能は云々

この外の事ども多能は君子の恥づる所なり(徒然草)

たゞ木の端云々

思はむ子を法師になしたらむこそはいと心苦しけれ。

さるはいと頼もしき業をただ木の端などのやうに思ひたらむこそいといとほしけれ(枕草子)

六 俳文二篇

横井也有

奈良團の贊

青によし奈良の帝の御時、如何なる叡慮にあづかりてか、此の地の名産とはなれりけん。世はたゞ其の道の藝精しからば、多能はなくてもあらまし。彼よ、かしこくも風を生ずるの外はたえて無能にして、一曲一かなでの間にも合はざれば、腰にたゞまれて公界にへつらふねぢけ心も無し。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならん。さるは、桐の箱の家をも求めず、瓢がもとの夕涼み、晝寢の枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住みして、鼠の足に汚さるれども、地紙をまくられて野

蓼花巷
現名古屋市中
區下前津町に
在った

一もとの芭蕉

芭蕉庵の芭蕉

五株の柳

陶淵明の故事

榎は云々

徒然草にある

良覺僧正の話

紫の一本の云々

武藏野の草は

皆がらあはれ

とぞ見る

(古今集)

松茸ざふの云々

朝まだき松茸

ざふの聲きけ

ば庭の杵も色

づきにけり

俊成卿

藤原俊成

歌人

元久元年(一

八六四)歿

年九十一

ざらしとなる扇にはまさりなん。われ汝に心をゆるす、汝、われに馴れて、はだか身の寝姿を、あなかしこ、人に語ることを勿れ。袴著る日はやすまする團かな

蓼花巷の記

一もとの芭蕉、五株の柳の、其の人の徳にてらされて枯れぬ名をとゞめしもあるに、不仕合はせなる榎は、ある僧正の號に呼ばれて、つひに斧の怒をかうぶり、なほ切杭堀池の名をさへ流しけん。

われ劔冠の仕途に身を置きながら、一つの隱家あり。これを蓼花巷と名づく。蓼花にむづかしき心は無けれど、夕日朝露の氣色心ゆくばかり、その一本のゆかりなきにもあらず。「松茸ざふの聲きけば」と、俊成卿の庭もせもなつかしく、世にわ

方士

臨邛の方士

三輪の山云々

我が庵は三輪

の山もと戀ひ

しくば訪ひ來

ませ杉立てる

門 (古今集)

は、き木

信濃國の傳説

梅の色も云々

君ならで誰に

か見せむ梅の

花色をも香を

もしる人ぞし

る (古今集)

思ふこと云々

思ふこと言は

でぞただにや

みぬべき我と

ひとしき人し

なれば

(伊勢物語)

壺入に云々

費長房の故事

鶉衣

十二卷

俳文集

びたる様のをかしげなれば自らこれが名とせり。そも此の幽栖、無何有の郷に隣りて、山に向かひ、海にそひ、河あり、野あり、月雪花鳥は四時の詠めを供し、時わかぬ松の夕風、竹の夜雨の音までも、聞くにいとはず、見るに乏しき物あらず。城市を出でて遠からねど、人たゞ杖草鞋をもてとはんとせば、たとへ方士がまめは踏み出すとも、三輪の山もと杉立てる門に迷ひて、ふせ屋のは、き木の晝狐に化され、宇津の山邊の道とふべき人にもあはで、再び桃源に棹さす如くならん。たゞ梅の色も香も知りて、思ふこといふべき人ならば、今も壺入に尋ねあたらん、茅門とは知るべしとなり。

物ずきの蟲は來てなけ蓼の花

(鶉衣)

小林一茶

名は信之

通稱彌太郎

俳人

信濃國(長野

縣)の人

文政十年(二

四八七)歿

年六十五

四月二十三日

享和元年(二

四六一)四月

二十三日

父
小林彌五兵衛

迅碩

野尻の里(現

長野縣上水内

郡信濃尻村野

尻)の醫師

七 みとり日記

小林一茶

四月二十三日 晴。此の日は清和の天雲なく晴れて、山時鳥の初音告げわたりけるが、父は茄子の苗などに水をかけておはしけるに、何とかおぼしけん、青陽の日なたをうしろにうけていました。いかなればかゝるあさましき處にうつぶしたまふらんと抱き起しはべるに、いかなる悪日にやありけん、「いさゝか心地なやましう」となんありけるに、急に發熱さかんにして、膚は火にさはるがごとく、飯をすゝむれども一箸も喉に通らず。こはいかにと驚き、魂を消すといへども、せんすべなく、唯揉みさするより外はなかりけり。

五月三日 晴。迅碩は、おのれが匙にては藥も得届かざる

旨を告げぬ。今まで神佛とも頼みし醫師にかく見放さるゝ上は、祕法佛力をかりて諸天應護のあはれみを乞はんと思へども、宗法なりとて許さず。たゞ手を空しうして最期を待つより外はなかりけり。

さてしも果てぬ事なれば、善光寺の醫師道有を招かまほしく、とみに人を走らせけり。未だ玉の緒の餘りて此の度は元の人に成りたまへと、醫師の來るをのみ待ち居たりけるに、日入りはてて門々に燈ひともす頃、やゝ駕の見えければ、とみに病人を見しむるに、迅碩がいへるがごとく、萬に一つも此の世の人とは見えずとなんいはるゝ。今は頼むべき綱も切れて、たゞ湯水の喉にかよふを力に夜の明くるを待ちたりけり。
四日 きのふに打變りて顔麗しく、何ぞ食べたきなどいは

善光寺
善光寺町
現長野市
天台・淨土兼
宗の名刹善光
寺が在る
道有
家田道有
善光寺の抱醫
師
法橋

るゝに、嬉しき限りなく、片栗粉など練りて參らせけるに、椀に三つ四つ二つ啜りこみたまふ。道有も、此のおもぶきにて變の來らざれば程なく快氣なるべし」となんいはるゝに、枕に附添ふおのれも、やゝ安堵の思をなしぬ。

道有老かへりたまふに、古間の里まで見送り侍る。雨雲も西へ東へかたづきて、空の様こよなうめづらしく、時鳥の初音折得顔に告げわたる。此の鳥、疾くも鳴きつらんに、父の異例の日より、日は日すがら夜は夜すがら、心を空にして仕へはべれば、魂狂ふ事のみにして聞きつるは今日始めての心地なりき。

時鳥我も氣あひのよき日なり
涼めとの許しの出たり門の月

古間の里
現上水内郡古
間村

けふ田植日とて、ゆひしたる人、雇ひたる人、家にある人、一とせに一度のしつけ日なれば皆出拂ひて、枕元につきそふは我ひとりなり。かくて日も壁にうすづき、飯時にもならんとする比、閨に入れまゐらせけり。

仙六
一茶の異母弟

七日 晴。仙六は、藥を乞ひに善光寺に行く。夏の日の徒然におはしければ、何ぞ食うべたきと問ひまゐらせけれども、穀の類しかゝと好みたまはねば、梨一つ參らせたくは思へども、篤刈る信濃の不自由なる我が里は、青葉隠れに雪のしろくくと残るばかり、野もせ山もせ、夏なほ寒き風の吹くのみなりき。

信濃
信濃國
現長野縣

逸早く、梅賣る人の聲の門に聞ゆれば、青梅たうべたきとむつかりたまへど、毒なりとて許さず。あはれ何時の日か、毒斷

ちのなき人にして見まほしく、掌の物とる如く心は矢竹に騒
げども、うつら／＼と頭重たげに見えたまふこと、あぢきなき
ありさまなりき。

八日 晴。田休みなればとて、所縁あるも所縁なきも、聞き
つたへ語り傳へて、訪ひ來る人も多かりき。父が好むものな
りとして、酒もて來るもあり、蕎麥粉もて訪ふもあり。父は悦ば
しげに、頭を擡げ、手を合はせ、ほど／＼に會釋したまふ。「身後
黄金北斗をさゝふとも、しかじ生前一杯の酒」と、唐も大和も人
の情等しく、亡き跡にて佛事供養美々しく盡くしたりとも、存
命の和らぐ言葉にはまさらじ。

此の夜は、子の刻一つの比より寐られねば、夜長うおぼして、
「いまだ夜は明けぬか、雞は鳴かざるか」と、我に聞きたまふこと

身後云々
身後堆金挂
北斗、不如
生前一樽酒、
(白樂天)

雞の空音を云々
齊の孟嘗君の
故事

昭王釋孟嘗
君。孟嘗君得
出即馳去。夜
半至函谷關。
關法雞鳴而
出。客。孟嘗
君恐。追至。客
之居。下坐。者
有能爲雞鳴。
而雞盡鳴。遂
發。傳出。

(史記)

入日を云々
楚の魯陽公の
故事
魯陽公與韓
構難。戰酣日
暮。授戈而搗
之。日爲之
反三舍。
(淮南子)

三度、四度、七度、九度に及べども、たゞ星明りのみして、軒のつま
の椋の木蔭、そこにかしこに暗く、梟の夜更をうたふばかり
なり。あはれ、雞の空音をつくりて關の戸開きしためしはあ
れど、夜の朗かなるてふは、天のなせるわざにして、火を袋に入
る、幻術は知らず、入日をかへす勢もあらねば、たゞ燈火をか
かけて寐顔をまもるばかりなり。

十日 晴。しきりに梨實をたうべたしとむつかりたまへ
ば、此の邊の、所縁あるも無きも、親しき限り、富みたる家、心あた
りある門、聞き盡くし尋ね探し盡くすといへども、一つだに貯
へたる人なく、夏さへ淋しき山里なり。

けふは藥の絶え間なれば、善光寺へ行かまほしく、曉に支度
して門を出づるに、皁月の空ほの／＼晴れて、白雪はた山にあ

り。青葉がくれの花は春を残して、種蒔きの山人懐かしく、時鳥の三聲、二聲も此の上なく時得顔なるに、なじかは心晴れぬ曙なりけり。

卯の下刻、牟禮てふ驛にいたるに、こは其の昔一茶江戸へおもぶける日、父の翁見送りたまひし里なりけるが、今は二十四年の昔なりき。河の音、坂の形もほのかに心覚えありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顔のみとなりけり。

醫師の家にいませる内にと足をはやめければ、辰の刻許りに善光寺に著く。醫師の家は未だ朝飯ころほひと見えて、道有老の聲かしこに聞えければ、とみに病のさまを語りけるに、聴てかうがへの匙とりて御薬合はせて賜はりけり。

抑、此の地は御佛の浄土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は

牟禮
現上水内郡中
郷村牟禮

雪中に云々

晋の孟宗の故事
宗母嗜筍、冬節將至、筍尙未生。宗入竹林哀歎、而筍爲之出。以供母。

(吳志註)

氷上に云々
晋の王祥の故事
祥性至孝。早喪親。繼母朱氏不慈。母常欲生魚。時天寒冰凍。祥解衣將剖冰求之。冰忽自解。雙鯉躍出。持之而歸。

(晉書)

風に飜り、入る人出づる人、國々より遙々歩みを運びて、未來の成佛を願はぬ人もなく、おのれは今日父の命をうけて御薬使はた、梨を探しに來つるなれば、此の役濟まさざらん内はと、御佛も遙拜して、天を翔り地を潛りてなりとも梨一つ得まほしく、ある程の乾物店ある程の青物店を足を空にして驅け巡るに、悲しきは、片割れ一つありともきかする人もなかりき。昔雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めたためしもあるに、我梨一つ得ること能はざるは、昊天我を捨てたまふや、佛神我を見限りたまふや、一世ばかりの不孝にはあらじ。父はさぞ梨を待ちて居たまはん。此の儘に歸りて、父を何とか慰めんと思へば、胸せきふたがり、忍びおつる涙は大道をうるほすに、往來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、しばらく手を組み、頭をうなだ

吉田
町 現長野市吉田

高田
市 現新潟縣高田

父の終焉日記
一冊
日記
享和元年成

れて、心をぞ鎮めける。

此の地に無きものいづちにかあらん。たゞ一足も早く戻りて、薬ばしすゝめ奉らんと、手を空しく吉田てふ里に来つるに、木立の山鴉三つ四つ五つ、我を見ては聲立つるに、何となく父の上の心にかゝり、息もつきあへず足を早むる程に、山の日影は八つ時といふ比、宿に戻る。父はいつよりも顔麗しく、笑みをふくみたまふに、梨を得ざることを語らば、又もや氣色をそこなはん、とやせんかくやせんとためらふに、父の聞きたまへば、ありのまゝを答ふ。「翌や、高田へ参りて尋ね來りてまらすべし」と、白雲のよすがもなき根なし事を申して父を宥め奉るは、本意なき夕なりけらし。

(父の終焉日記)

本居宣長

號は鈴屋

國學者

伊勢國(三重

縣)の人

享和元年(二

四六一)歿

年七十二

縣居の大人

賀茂眞淵

國學者

遠江國(静岡

縣)の人

明和六年(二

四二九)歿

年七十三

古事記

三卷

國初から推古

天皇迄の史書

和銅五年(一

三七二)撰進

萬葉集

二十卷

奈良朝時代に

成った歌集

八 物學 び

本居 宣長

宣長三十あまりなりし程、縣居の大人の教を承りそめし頃より、古事記の注釋をものせむの志ありて、そのこと大人にもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われももとより神の御典ふみをとかむと思ふ志あるを、そはまづ漢意かみじを清くはなれて、古へのまことの意をたづね得ずはあるべからず。然るにその古への意を得むことは、古言を得たる上ならではあたはず。古言を得むことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に、われはまづもはら萬葉をあきらめむとする程に、すでに年老いて、残りのよはひいまいくばくもあらざれば、神の御典をとくまでに至ること得ざるを、いましは年さかりにて行さき

長ければ、今より怠ることなく、いそしみ學びなば、その志とぐることあるべし。但し、世の中のものまなぶともがらを見るに、皆低き所を経ずて、まだきに高き所にのぼらむとする程に、



（像畫自）長宣居本

低き所をだに得ること能はず。まして高き所は得べきやうなければ、みなひがことのみすめり。このむねを忘れず、心にしめて、まづ低き所よりよくかためおきてこそ、高き所にはのぼるべきわざなれ。わがいまだ神の御典をえとかざるは、もはらこのゆゑぞ。ゆめ、品をこえて、まだきに高き所をな望みそと、いとねもごろになむいましめさとし給ひたりし。

この御さとし言のいとたふとくおぼえけるまゝに、いよいよ萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞして、古への意詞をさとり得て見れば、まことに世の物識り人といふものの神の御典説ける趣は、みなあらぬ漢意のみにして、さらにまことの意はえ得ぬものになむありける。

おのれ古典いにしへのみをとくに、師の説とたがへること多く、師の説のわろき事あるをばわきまへいふことも多かるをいとあるまじきことと思ふ人おほかめれど、これ即ちわが師の心にて、常に教へられしは、後によりき考の出で來らむには、必ずしも、師の説に違ふとてなはゞかりそとなむ教へられし。こはいと尊き教にて、わが師の世にすぐれ給へる一つなり。

大かた古へを考ふる事、さらに一人二人の力もて悉くあきらめつくすべくもあらず。又よき人の説ならむからに、多くの中には誤もなかなからむ。必ずわろきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今は古への意悉く明らかなり、これをおきてはあるべくもあらずと思ひ定めたることも、思ひの外に又人の異なるよき考も出でくるわざなり。あまたの手を経るまに、さき／＼の考の上を、なほよく考へきはむるからに、つき／＼にくはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるに古きを守るは、學問の道にはいふかひなきわざなり。

又、おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いともか

しこくはあれど、それも、いはざれば世の學者その説にまどひて、長くよきを知る期なし。師の説なりとて、わろきを知りながらいはず、つゝみかくしてよさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は、道を尊み古へを思ひて、ひたぶるに道の明らかならむことを思ひ、古への意の明らかならむことをむねと思ふが故に、わたくしに師を尊む理の缺けむことをばえしもかへりみざることあるを、猶わろしとそしらむ人はそしりてよ。そはせむかたなし。われは人にそしられじ、よき人にならむとて、道をまげ、古への意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。

われにしたがひて物學ばむともがらも、わが後に、又よき考のいできたらむには、必ずわが説にななづみそ。わがあしきゆゑを言ひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは道を明らかにせむとなれば、かにもかくにも道を明らかにせむぞ、われを用ふるにはありける。道を思はで、いたづらにわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

ちかき世、學問の道ひらけて、大かた萬づのとりまかなひ、さとかしこくなりぬるから、とりふゝに新なる説を出す人多く、その説よろしければ世にもはやさるゝによりて、なべての學者、未だよくもとのほぬほどより、われ劣らじと世に異

なるめづらしき説を出して、人の耳をおどろかすこと、今の世のならひなり。その中には、随分によろしきことも稀にはいでくめれど、大方いまだしき學者の心はやりていひ出づることとは、たゞ人にまさらむ勝たむの心にて、かるふゝしく、まへしりへをもよくも考へ合はせず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くは、なか／＼なる、いみじきひがごとのみなり。

すべて新なる説を出すは、いと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、違ふ所なく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけはりてよしと思ふも、ほど經て後にいま一たびよく思へば、なほわろかりけりと、われながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

(玉勝問)

玉勝問
十四卷
隨筆集
寛政七年(二
四五五)刊

上田秋成

國學者 歌人
浮世草子・讀

本作者

大阪の人

文化六年(二

四六九)歿

年七十六

文治

後鳥羽天皇の

御代の年號

(一八四五-

一八四九)

鎌倉の大將殿

源頼朝

鶴岡の宮居

現神奈川縣鎌

倉郡鎌倉町に

在る國幣中社

九月の前

上田秋成

文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前追ひ、御あとべ仕うまつれる渚に遊ぶ葦田鶴の歩みして、疾からず、遅からず、列を亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折り伏せ、畏みたいまつる人あまたあるに、警衛して、あなとだにいはせず、世に厳しく尊き御有様なり。
かへりまをしして、御手輿にめさせ給ふほど、さとき御まなじりに見とゞめさせ給ひ、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、いと瘦せ黒みづきたるに、衣杖笠などもかたる者のさましたるが、目を偷みてう

圓位

西行

俗名佐藤義清

歌人

元左兵衛尉

建久元年(一

八五〇)歿

年七十三

穴熊の云々

周の大公望呂

尙の故事

西伯將出獵、

卜之。曰、非

龍、非、龍、非

虎、非、龍、非

獲霸王之輔。

於是周西伯

獵、果遇大公

於渭水之陽。

(史記)

ずすまりをるなほ人ならずおぼしけん、あの法師が修行するやう、名をも問へ」と仰せたらうぶ。御輿添ひの若侍、急ぎ走りよりに、ありがたく御目たまへり。何處よりの修行ぞ、名をも申せよ」といふ。ゆくりなきに驚きざまして、雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申すといふ。聞し召されて、さればこそ聞き知りたれ。穴熊のたけき獲物のたぐひならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らん。我が後につきて來れといへ」とて、召し連れさせ給へり。

御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがて大殿油あまた照らしかゝげたり。「けふの道ゆきづとゐて」と仰せたらうぶ。「法師參れ」とて、御座近き所の一間なる所の簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕へせし人の

八百日ゆく云々
八百日ゆく濱
の眞砂を敷き
かへて玉にな
しつる秋の夜
の月

(千載集)

伊勢の海云々
伊勢の海の千
尋の濱に拾ふ
とも今は何て
ふかひかある
べき

(後撰集)

世をはかなきものに思ししみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎の譽は、物の心なき東人さへ聞き知りたるぞ。文字の數だに歌とのみ思ひしも、かう差向かひては、ものゝふの負けじ心もあらずなりぬるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には玉とて拾ひ收めたらんを、かたりて聞ゆべく仰せたるうぶ。

いみじくかしこまりて、思ひかけず大木の御蔭に参り侍れば、いとも輝かしきにぞ、たゞ夢路たどるやうに侍りて、聞え奉るべきことも侍らず。さとき御眼に見現され侍るこそいとも有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひ侍れど、かひあることも打出て侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに思しよらせ給ふに

は、かけても及ぶまじきをさへ思し知り侍る。大空に羽打ちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅がもとの蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あなかしこしと申す。

打笑ませ給ひ、弓とりし人の、もとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまにと聞くはまことか。歌はものゝふの荒々しき心には詠みうつすまじきものに、宮人達はさたし給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、この三十字餘りの學びには、心のおくるゝはいかに。「こはかしこき御心にもおぼしまどはせ給ふものか。古への代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢みとらして軍にたゝせたまひし、其の御歌をよみ見奉れば、猛く直々しく、調べもいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌よまんとては、ますらを心をとにかくし、あ

大風起り云々

揚。威加海内

兮歸故郷。

(漢の高祖)

烏鵲南に云々

月明星稀。烏

鵲南飛。繞樹

三匝。無枝

可依。

(魏の曹操)

秀郷

藤原秀郷

西行九世の祖

天慶の亂に平

將門を討つた

てになよびかにかのみ詠みうつすべくするこそ此の道のいみ
じき煩ひなれ。君がさとく猛き御心のまゝにうちまねばせ
給はんには、今の世の人誰かは立ちあへ奉らん。三尺の劔を
とりて、大風起り、雲飛揚すとうたひ、槊を横たへて、烏鵲南に」と
詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等
がいみじきを磨りみがき、染殿の八入の色も、はかなき目うつ
りばかりは何にかは。されど、谷ふかき鶯の聲、信濃路出づる
荒駒の歩み、いづれの道、何の業にも、初より優れたらんは鬼に
こそ侍らめといふ。

「人々あれ聞き給へ、世は捨て遁れても、頼もしき人の心なら
ずや。汝が遠祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手と
なん聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそとおぼしし

みぬる事は忘れずてぞあらめ。事一言にても教へ承るべし。」

「こは益、恐ある御問はせなり。御物語のはては、兵の道し
ばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にだに、
物問はせ給ふ事の忝さよ。向かひ奉りてはおこがましく家
の傳へなりなどとして聞えや奉るべき。まして有難き大宮仕
へを否みたいまつり、御親達の慈しみをさへあだなるものに、
年わづかに二十三にして家を出でたるいたづら者の、弦ひき
一つだに心にとゞめし事も侍らず。たゞ一言の忘れがたき
は、賞を重くし、罰を軽くせよ」といひしと、任ずる者を恥づかし
むれば危し」といひし有難さよ。士卒の疽を病めるを吮ひし
は、人の心をよく買ひなすといへども、まことの情よりも覺
え侍らず。竈を減じて人をあやふきに陥るゝは、將帥のさか

士卒の疽を云々

魏將吳起の故

事

起之爲將、

與士卒分勞

苦。卒有病

疽者、起爲吮

之。(史記)

竈を減じて云々

齊將孫臏の故

事

使齊軍入魏

地爲十萬竈、

明日爲五萬

竈、又明日爲

三萬竈、

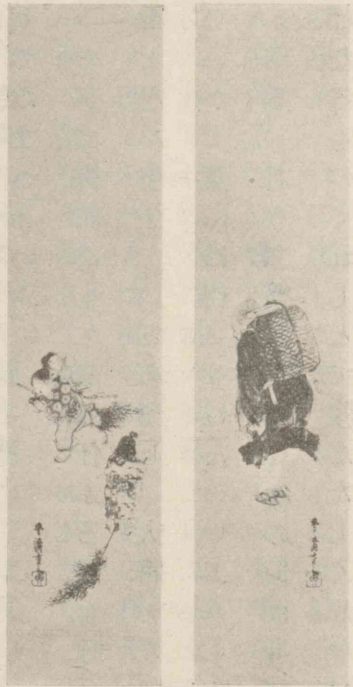
(史記)

しきにて、國を治め、天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出し給へる事のあやしきまで賢くませるを、餘所ながら聞き奉るには、此の御問、ゆるさせ給へ」と、額を板敷にすりつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語り、今ははたしてん。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒のまざるべし。鹿猿の中に立交りて、歌よめといふとも詠むまじ。たゞ我が前にて遊べ。風冷やかなるにもあかず飲み、ものきたなげに食ひちらす人はあたゝかにもこそ。此の火とり法師に參らせよ」とて、白銀もて作りたる猫の形したるをとり傳へて、「君より賜はる」とて、前に置きたり。「鹿猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ瘦

法師がためには、似つかはしき御賜物ぞ」とて、三度おしいたゞきぬ。

翌朝御暇たまはりて立出づるに、御館の人やどりに、誰殿の



(筆崎香口谷)ふ奥を猫銀に童行西

童ならん、くゝり袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、これ取らせん。火埋みて手足あ

たゝめよ」とて、彼のきら／＼しき物を與へて、かへりみもせて立去りぬ。

童うち驚き、「これ見給へ。見も知らぬ法師の、見も知らぬ物

を賜ひつるは」とて、青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰かは得させん。竊みやしつる」といふ。「さらにく。道のそらにかゝるものやはあるべき。あなおそろし、殿に奉りてたまへ」といふ。

やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼び出でて、しかくの事となん申す。「いとあやし。大將どのの法師にたまはりしを、いかで童には得させけん。いぶかし」とて、先づいそぎて聞え奉る。君うち笑みたまひ、彼の似而非法師、あなづらしく、幼げなるものくれしとて、腹だたく思ひけん。我が門の前に捨て行きつるよ。法師とても男だましひなくば、修行もえせぬなるべし。されど、家を出でて猶身を守り、才に誇りて野山にまじり、歌よみてのみあるは、捨人の棄てらるべき淺ましき

ぞかし。一度けがれし物、其の童にとらせよ」とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ、右府は誠にねぢけたる君なり。口に蜜したまへど心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智徳あるに似て、天下の人みな此の君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふ事を生まれ得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、此の後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは」とて、涙とゞめがたくして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞き傳へては、秋の夕暮ならずもうち顰みぬべし。

(藤篋冊子)

右府 頼朝
漢高 漢の高祖
鄧邦 前漢の第一世
曹孟徳 魏の太祖武帝
心なき身云々
あはれは知られけり鳴立つ
澤の秋の夕暮
(西行)
藤篋冊子
六卷
歌文集
文化三年(二四六六)刊

瀧澤馬琴
名は解

讀本・草雙紙
作者

江戸の人

嘉永元年（二

五〇八）歿

年八十二

芳流閣

古河城の樓閣

禍福は云々

夫禍之與福

分、何異糾纏

（漢書）

塞翁が馬

淮南子の寓話

それは福の云々

禍兮福之所

倚、福兮禍之

所伏、孰知

其極。（老子）

犬塚信乃

名は戌孝

八犬士の一

古河

現茨城縣猿島

郡古河町

一〇 芳流閣

瀧澤馬琴

古への人いはずや、禍福は糾ふ纏の如し」と。人間萬事、往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極みを知らん。憐むべし、犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、艱苦のうち、年を経て、得難き時を得てしかば、遙々古河へ齎して、名を擧げ家を興すべかりしその福は禍とふりかはりたる、村雨の刃は舊の物ならて、我が身を劈く讐となりし、憾をこゝに釋く由もなく、事急にして意外にあり。纔かに當座の辱しめを避けばやと思ふばかりにあまたの圍みを切り開きて、芳流閣の屋の上に攀ぢ登れども、と

犬飼見八信道
八犬士の一

坂東太郎

利根川の異稱

現群馬・新潟

長野三縣界に

在る三國山脈

に發源し關東

平野を貫流し

て太平洋に注

ぐ

關東地方第一

の大河

にかくに、脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死をきはめたる、心の中はいかなりけん、想ひやるだにいと痛まし。されば又、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋がれし、禍は今恩赦の福。我が縛めの索解けて、人にぞかかる捕手の役儀。「犬塚信乃を擲めよ」とて、なまじひに擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませ、て登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、焔熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波に似て、下には大河滔々たる、こゝ生き死にの海に入る、流れは名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫緒絶えて、進退既に

成氏朝臣
足利成氏

持氏の子

鎌倉管領

横堀史在村

足利家の執權

墨氏

墨子

名は翟

支那周代の魯

の學者

嘗て飛鳶を作

つた

魯般

公輸般

周代の魯の工

人

嘗て雲梯を作

り墨子と攻防

を試みた

谷りし敵にしあれば、いかでわれ繋ぎとめんと、颯の木傳ふ如くさらさらと、登り果てたる三層の屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇をろちの狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せる床几に腰をうち掛けて、勝負いかにと見上げたり。又閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍長刀をさし見かし、或は箭を負ひ弓杖突き立て、組んで落ちなば撃ち留めんとて、項を反らしてこれを觀る。加之、外の方は、綿連として杳なる河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。彼、鳥ならねど

羅に入りぬ、獸ならねど狩場に在り。三寸息絶えなば、事みな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。

その時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで追ひ登らんとせし兵等を斬り落しつる後は、絶えて近づく者なきに、今たゞひとり登り來ぬるは、世に覺えある力士ならん。しやつは是、膳臣かしたのおみはて巴提便が虎を手うちにする勇あるか、また富田三郎が鹿の角を裂く力あるか、さもあらばあれ一人の敵なり、引組んで刺し違へ、死するに難きことやはある、よき敵にこそござんなれ、目に物見せんと、血刀を袴の稜すまもて押拭ひ、高瀬の如き方桴せむらひに立つたるまゝに、寄するを待てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり、さりとても搦めかねて、他の援けを借ることあらば、獄舎の中よりこの役儀に擇み

膳臣巴提便
欽明天皇の御
代の人
嘗て百濟に使
し單身猛虎を
瘞した

富田三郎

和田義盛の臣

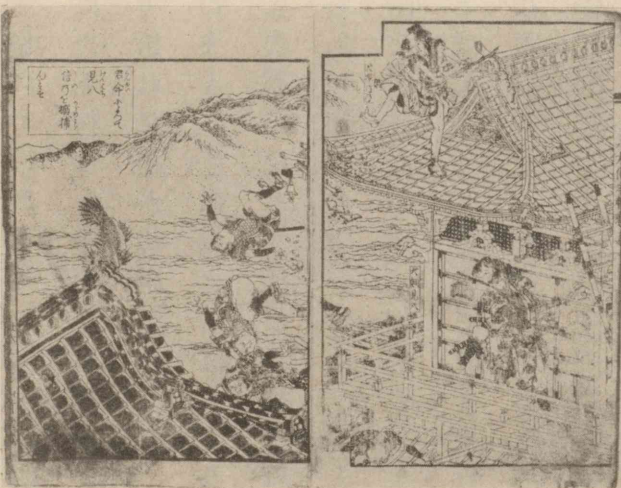
嘗て大鹿角二

箇を重ね折つ

た

出されしかひもなし。搦め捕るとも撃たるゝとも勝負を一
 時に決せんものと思ひにければ、ちつとも擬議せず、御諛ざ
 ふ」と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の
 左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。「心得
 たり」と、鋭き太刀風に撃つをはつしと受け留めて、拂へば透か
 さず込む刀尖を、支へて流す一上一下、滑る蔓を踏みとめて、頻
 りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀
 筋を、あちこち外す虚々實々。未だ勝負を判かざれば、廣庭な
 る主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬きもせず氣を籠めて、
 見る目もいと遙かなり。
 さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけ
 りと思へば、勇氣いやまして、刀尖より火出づるまで寄せては

返す太刀音、掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青



南總里見八犬傳插繪

浅瘡を負ひしより、次第に疼みを覺ゆれども、足場を揣りて、撓

まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ。十手をちやうと受けとむる、信乃が刀は鏢際より折れて、遙かに飛び失せつ。見八得たりとむづと組むを、そがまゝ左手に引き著けて、互みに利腕しかと取り、振ぢ倒さんと曳聲合はせて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏み滑らして、河邊の方へころ／＼と、身を輾ばしし覆車の俵坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣がけに、削り成したる臺の勢、とどまるべくもあらざれど、互みに執つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで、程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、うち累りつゝ、どうと落つれば、傾く舷へらと立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張りきつて、射る

矢の如き早河のたゞ中へ吐き出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

思ひがけなき爲體に、士卒等しく騒ぎたちて、こゝかかしこかと罵る程に、閣中の番卒のみ、窓より件の光景をよく認めたりければ、やがて云々つづるになん、成氏聞きて且怒り、且疑うて、しばしもあらず、みづから閣に進み入り、窓よりして見給ふに、げにこの頃魚獵すなどりの爲にとて、外面に繋がせし一艘の快船なし。只、張りきれたる纜の末のみ岸の杭に遣れり。

(南總里見八犬傳)

南總里見八犬傳
九十八卷
讀本
天保十二年
(二五〇一)成

尾崎紅葉

名は徳太郎

小説家

東京市の人

明治三十六年

歿 年三十七

鹽原

栃木縣鹽谷郡

鹽原町

西那須野の驛

同縣那須郡西

那須野町に在

る東北本線の

一驛

一一 鹽原

尾崎紅葉

西那須野の驛に下車してより、直ちに西北に向かひて、今猶
茫々たる古への那須野ヶ原に入れば、天は闊く、地は遐に、唯平
蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其
處ぞと見えて、行くほどに路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進
みて關谷村に到れば、人家の盡くる處に、涼々の響ありて、之に
架れるを入勝橋と爲す。

輒ち橋を渡りて、僅かに行けば、日光暗く、山厚く、疊み、嵐氣冷
やかに、壑深く、陥りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹に聲
聲の鳥鳴き、前には幽草歩々の花を發き、愈、登れば、遙かに木隱
れの音のみ聞えし、流れの水上は、淺く露れて、すはや、こゝに空

此の緒よりや

琴の音に峯の

松風かよふら

しいづれの緒

よりしらすそ

めけむ

(拾遺集)

山の雷白光を放ちて、頽れ落ちたるかと、凄じかり。道の右は
山を削りて、長壁となし、石幽に、藓碧うして、幾條ともなく、白絲
を亂し、懸けたる細瀑、小瀧の、珊々として、灑げるは、嶺上の松の
調べも、定めて、此の緒よりやと、見捨て難し。

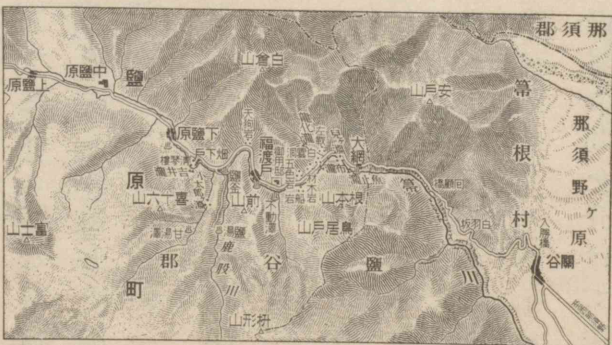
車を驅りて、白羽坂を、踰えてより、回顧橋に、三十尺の飛瀑を
ふみて、山中の景は、始めて、奇なり。これより、行きて、道あれば、
水あり、水あれば、必ず、橋あり、全溪にして、三十橋。山あれば、巖
あり、巖あれば、必ず、瀑あり、全嶺にして、七十瀑。地あれば、泉あ
り、泉あれば、必ず、熱あり、全村にして、四十五湯。猶、數ふれば、十
二勝、十六名所、七不思議、誰か、一々、探り得べき。

抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より、群峯の間を、分けて、深く
西北に入り、綿々として、箒川の、流れに、浜る、片岨の、四里に、岐れ、

龍ヶ鼻
材木岩近傍の
平地

十一里に互りて、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀧兒ヶ淵左軼の險は古りて、白雲洞は朗かに、布瀧龍ヶ鼻材木岩五色岩船岩などと眺め行けば、鳥居戸前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

途すがら前面の崖の處々に躑躅の残り、山藤の懸れるが甚だ興あり。此の邊殊に谿淺く水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに



鹽原附近圖

似たり。車夫を顧みて處の名を問へば、不動澤といふ。遙かに望めば行路の雲間に塞がりて、咄々、何等の物かと先づ驚かさる、異形の屏風巖地を抜く何百丈と見上ぐる絶頂には、はらばら松も危く立ち竦み、幹竹割に割り放ちたる断面は半空より一文字に垂下して、岌々たる其の勢、幾ど眺むる眼も留らず。「是こそ名にし負ふ天狗巖としたり顔に車夫は案内す。足に任かせて、彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れ競ふが如し。此の亂流の間に横たはりて、高さ二丈に餘り、其の頂は平に闊がりて、ゆたかに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚に死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、さま恐しげに蹲りて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪に漬かりて、

蒲生飛驒守氏郷
織豊時代の武
將
陸奥國(福島
縣)會津城主
文祿四年(二
二五五)歿
年四十

野立石
退馬橋附近の
河中に在る岩

袖の澤
畑下戸附近で
箒川に入る溪
流

夜なく、天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。「其の昔蒲生飛驒守氏郷此の處に野立せしことあるに因りて、野立石とは申す」と車夫のいふ。再び車に乗りて急ぐ。甘湯澤小太郎が淵など思ひやりつゝ、早くも畑下戸の里に著きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に通きて、五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く廻れる磧に臨めり。俯せば水石の鄰々たるを見、揚げば西は富士喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ち來る流れは二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたり。吉井瀧といふ。東北は山又山を重ねて、一望のうち丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮む。げに又有るまじき清福自在の別境なり。

我は此の繪を見る如き清穩の風景にあひて、彼の途上險しき巖と激しき流れとの爲に幾度か魂飛び肉銷して理むる方なく搔亂されし胸の中は、藹然として頓に和らぎ、恍然として總べて忘れたり。誠に好くこそ我は來つれ。胡ぞ來るの甚だ遅かりし。見よ、見よ、木々の緑も、浮かべる雲も、秀づる峯も、流るゝ溪も、時つ巖も、吹き來る風も、日の光も、雞の鳴く音も、空の色も、皆自ら憂世の物ならで、我はこゝに憂を忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを忘れ、勞れを忘れて、身は彼の雲と軽く、心は水と淡し。

性來多く山水の美に親しまざりし我は、殊に心往く所を知らざるばかりに愛で悦び、瀧に向かへる欄干に倚りて、少時は其の傍らを離れ得ざるなりき。

(紅葉全集)

幸田露伴
名は成行

小説家

文學博士

帝國學士院會
員

東京市の人

慶應三年(二
五二七)生

七藏

感應寺の寺男

十兵衛

感應寺の五重
塔を建てた大
工の棟梁

一二 五重塔

幸田露伴

耄碌頭巾に首をつゝみて、其の上に雨を凌がん準備の竹の皮笠引被り、鳶子合羽に胴締めして手ごろの杖持ち、恐怖ながら烈風強雨の中を駈け抜けたる七藏爺、やうやく十兵衛が家にいたれば、これはまた酷い事、屋根半分はもう疾うに風に奪られて見るさへ氣の毒な親子三人の有様隅の方にかたまり合うて天井より落ち来る點滴の飛沫を古筵で纔かに避ける始末に、さても十兵衛は氣に働の無い男と、呆れ果てつゝ、これ棟梁殿此の暴風雨にさうしてゐられては濟むまい。瓦が飛ぶ樹が折れる、戸外はまるで戦争のやうな騒の中に、お前の建てられた彼の塔はどうあらうと思はるゝ。丈は高し、周圍

圓道
感應寺の役僧
爲右衛門
感應寺の用人
頭



天王寺五重塔

に物は無し、基礎は狭し、どの方角から吹く風をも正面に受けて、揺れるはく、旗竿ほどに撓んではきちくと材の軋る音の物凄さ、今にも倒れるか、壊れるかと、圓道様も爲右衛門様も膽を冷したり縮ましたりして、氣が氣では無く心配してゐらるゝに、一體ならば迎など受けずとも、此の天變を知らず顔では濟まぬお前が、出ても來ぬとは餘りな大勇。お前の御蔭で險難な使をいひつかり、いまくしい此の瘤を見てくれ。笠は吹き攪はれる、全濡にはなる、おまけに木片が飛んで來て額にぶつかりくさつ

たぞ。いゝ面の皮とはおれがことさあゝ一緒に来てくれ、来てくれ爲右衛門様圓道様が連れて来いと御命令おひみつけだは。え、吃驚した、雨戸が飛んで行て仕舞うたのか。これだもの、塔が堪るものか。話しする間にももう倒れたか折れたか知れぬ。愚圖々々せずと身支度せい。疾はやくゝと急せり立つれば、十兵衛不興氣に、七藏殿御苦勞でござりましたが、塔は大丈夫倒れませぬ。何の、これ程の暴風雨で倒れたり折れたりするやうな脆いものではござりませぬは。十兵衛が出掛けてまゐるにも及びませぬ。圓道様にも爲右衛門様にもさういうて下され。大丈夫大丈夫でござりますと落著きはらつて身動きもせず答ふれば、七藏少し膨れ面して、まあ兎も角も我と一緒に来てくれ。来て見るがよい、彼の塔のゆさゝきち

きちと動くさまを。此處にみて目に見ねばこそ威張つてゐられる、御開帳の幟のやうに頭を振つてゐるさまを見られたら、何程なんば十兵衛殿寛闊な氣性でも、お氣の毒ながら魂魄たましひがふはりふはりとならるゝであらう。陰で強いのが役にはたゝぬさあゝ、一緒に来たりゝ。それまた吹くは、嗚呼恐しい。中々止みさうにもない風の景色、圓道様も爲右衛門様も定めし肝を煎つてゐらるゝぢやろ、さつさと頭巾なり、半纏なり、冠るとも被るともして出掛けさつしやれと遣り返す。「大丈夫でござりまする。御安心なさつて御歸り」とつっぱねる。「其の安心がさう容易くは出来ぬはい」とうるさく云ふ。「大丈夫でござりまする」と同じことをいふ。末には七藏焦れこんで、「何でも彼でも来いというたら来い。おれの言葉とおもうた

御上人様
朗圓上人
感應寺の住職

ら違ふぞ。圓道様爲右衛門様の御命令ぢや」と語氣荒くなれば、十兵衛も少しむつとして、我は圓道様爲右衛門様から五重塔建てといとはいひつかりませぬ。御上人様は定めし、風が吹いたからとて十兵衛よべとは仰しやりますまい。其の様な情無い事を云うては下さりませぬ。若しも御上人様までが「塔危いぞ、十兵衛呼べ」と言はるゝやうにならば、十兵衛一期の大事、死ぬか生きるかの瀬戸に乗つかゝる時、天命を覺悟して駆けつけませう、なれど御上人様が一言半句十兵衛の細工を御疑ひなさらぬ以上は、何心配の事も無し。餘の人たちが何を言はれうと、紙を材にして仕事もせず、魔術も手抜きもしてゐぬ十兵衛、天氣のよい日と同じことに、雨の降る日も風の夜も、樂々としてをります。暴風雨が怖いものでも無けれ

感應寺
江戸谷中の寺
現東京市下谷
區谷中に在る
天台宗の名刹
天王寺に取材
したといふ

のつそり
十兵衛の綽名

ば、地震が怖うもござりませぬと圓道様にいうて下され」と愛想なく云ひ切るにぞ、七藏仕方なく風雨の中を駆け抜けて感應寺に歸りつき、圓道爲右衛門に此の由言へば「さて其の場に臨んでの智慧の無い奴め。何故其の時に「上人様が十兵衛來いと仰せぢや」とは言はぬ。あれ〜あの揺るゝ態を見よ、汝までがのつそりにかぶれて寛怠過ぎた料簡ぢや。是非は無いも一度行つて上人様の御言葉ぢやと欺誑り、文句いはせず連れて來い」と圓道に烈しく叱られ、いま〜しさに獨語きつゝ、七藏ふたゝび寺門を出でぬ。

「さあ十兵衛、今度は是非に來よ。四の五のは言はせぬ。上人様の御召しぢやぞ」と七藏爺いきりきつて門口から我鳴れ

ば、十兵衛聞くより身を起して、なにあの上人様の御召しなさるとか。七藏殿それは眞實でござりまするか。嗚呼なさけ無い。何程風の強ければとて、頼みきつたる上人様までが、此の十兵衛の一心かけて建てたものを、脆くもこはるゝかのやうに思し召されたか、口惜しい。世界に我を慈悲の目で見て下さるゝ唯一つの神とも佛とも思うてゐた上人様にも、眞底からは我が手腕たしかと思はれざりしか。つくゝ頼もしげ無き世間、もう十兵衛の生き甲斐無し。たまゝ當時に雙びなき尊き智識に知られしを、是一生の面目と思うて空に悦びしも、眞に果敢無き少時の夢。嵐の風のそよと吹けば、丹誠凝らせし彼の塔も倒れやせんと疑はるゝとは、えゝ腹の立つ、泣きたいやうな。それほどおれは腑の無い奴か。恥をも知

らぬ奴と見ゆるか。自己が爲たる仕事に恥辱を受けても、めのめ面押し拭うて自己は生きてゐるやうな男とおれは見らるゝか。假令ば彼の塔倒れた時、生きてゐようか、生きたからうか。えゝ口惜しい、腹の立つ。嗚呼々々生命ももういらぬ。我が身體にも愛想が盡きた。此の世の中から見放された十兵衛は、生きてゐるだけ恥辱をかく、苦情を受ける。えゝいつそのこと塔も倒れよ。暴風雨も此の上烈しくなれ。少しなりとも彼の塔に損じの出来てくれよかし。空吹く風も地打つ雨も、人間ほど我にはつれなからねば、塔破壊されても、倒されても、悦びこそせめ、恨みはせじ。板一枚の吹きめくられ、釘一本の抜かるゝとも、味氣なき世に未練はもたねば、物の見事に死んで退けて、十兵衛といふ愚魯漢は、自己が業の粗漏より、

恥辱を受けても、生命惜しさに生き存へてゐるやうな鄙劣な奴では無かりしか、かゝる心を有つてゐしか」とせめては後にて弔はれん。一度はどうせ捨つる身の、捨て處よし、捨て時よし。佛寺を汚すはおそれあれど、我が建てしもの壊れしならば、其の場を一步立去り得べきや。諸佛菩薩も御許しあれ。生雲塔の頂上より、直ちに飛んで身を捨てん。投ぐる五尺の皮囊は潰れて醜かるべきも、きたなきものを盛つてはをらず。あはれ男兒の醇粹清淨の血を流さんなれば、愍然ともこそ照覽あれ」と、夢路を何時の間にか辿り、七藏にさへ何處でか別れて、此處は、おゝ、それその塔なり。

上りつめたる第五層の戸を押明けて、今しもぬつと十兵衛半身あらはせば、礫を投ぐるが如き暴雨の眼も明けさせず面

生雲塔
感應寺の五重
塔

を打ち、一つ残りし耳までもちぎらんばかりに、猛風の、呼吸さへさせず吹きかくるに、思はず一足退きしが、屈せず奮つて立出でつ。欄を握んで屹と睥めば、天は五月の闇より黒く、たゞ囂々たる風の音のみ宇宙に充ちて物騒がしく、さしも堅固の塔なれど、虚空に高く聳えたればどう／＼どつと風の來る度ゆらめき動きて、荒浪の上に揉まるゝ棚無し小舟の、あはや覆らん風情、さすが覺悟を極めたりしも、又今更に思はれて、一期の大事、死生の岐路と、八萬四千の身の毛豎たせ、牙咬みしめて、臉を睜り、いざ其の時はと手にして來し六分鑿の柄、忘るゝばかり引握んでぞ天命を靜かに待つとも知るや、知らずや、風雨いとはず、塔の周圍を幾度となく徘徊する怪しの男一人ありけり。

去る日の暴風雨は我等生まれながら以來第一の騒なりし
 と、常は何事に逢うても二十年前三十年前にありし例をひき
 出して古きを大袈裟に新しきを譯も無く言ひ消す氣質の老
 人さへ、眞底我折つて噂仕合へば、まして天變地異をおもしろ
 づくで話語の種子にするやうの剽輕な若い人は分別も無く、
 後腹の疾まぬを幸ひ、何處の火の見が壊れたり、彼處の二階が
 吹き飛ばされたりなどと様々の沙汰に及びけるが、いづれ
 も感應寺生雲塔の釘一本ゆるまず、板一枚剝がれざりしには
 舌を巻きて讚歎し、いや彼塔を作つた十兵衛といふは、何とえ
 らいものではござらぬか、彼の塔倒れたら生きてはるぬ覺悟
 であつたさうな、すでの事に、鑿銜んで十六間眞逆さまに飛ぶ

甚五郎
 左甚五郎
 建築・彫刻の
 名人と傳へら
 れる
 浅草
 現東京市浅草
 區の内
 天台宗の名刹
 浅草寺が在る
 芝
 現同市芝區の
 内
 淨土宗の大本
 山増上寺が在
 る

ところ、欄干をかう踏み、風雨を睨んで彼程の大揉めの中に泰
 然と構へてゐたといふが、其の一念でも破壊れまい。風の神
 も大方血眼で睨まれては遠慮が出たであらうか、甚五郎この
 かたの名人ぢや、眞の棟梁ぢや、浅草のも芝のもそれ／＼損じ
 のあつたに、一寸一分歪みもせず、退りもせぬとは能う造つた
 事の。いやそれについて話のある、其の十兵衛といふ男の親
 分がまた滅法えらいもので、若しも、ちとなり破壊れでもした
 ら、同職の耻辱知合の面汚し、汝はそれでも生きてゐられうか
 と、とても再び鐵槌も手斧も握る事の出来ぬほど引叱つて、武
 士で言はば詰腹同様の目に逢はせうと、ぐる／＼大雨を
 浴びながら塔の周圍を巡つてゐたさうな。いや／＼、それは
 間違親分では無い、商賣上敵ぢやさうな」と、我知り顔に語り傳

源太
川越の源太
感應寺を建て
た大工の棟梁

へぬ。

暴風雨のために準備狂ひし落成式もいよ／＼濟みし日、上人わざ／＼源太をよび給ひて十兵衛と共に塔に上られ、心あつて雛僧ひなぞうに持たせられし御筆に墨したゝか含ませ、我此の塔に銘して得させん。十兵衛も見よ、源太も見よと宣ひつゝ、江都の住人十兵衛之を造り、川越源太郎之を成す、年月日とぞ筆太に記し了られ、満面に笑みを湛へて振顧り給へば、兩人ともに言葉なく、たゞ平伏ひれふして拜謝をみけるが、それより寶塔長へに天に聳えて、西より瞻れば、飛椽或時素月を吐き、東より望めば、勾欄夕に紅日を吞んで、百有餘年の今になるまで、譚は活きて遣りける。

(露伴全集)

北村透谷
名は門太郎
詩人 評論家

神奈川縣の人
明治二十七年
歿年二十七

一三 一夕観

北村透谷

ある宵、我、窓にあたりて横たはる。處は海の郷、秋高く、天朗かにして、よろづの象、よろづの物、凜乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が偏促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく、能なく、辨なく、氣なきを罵るに似たり。彼は斯くの如く我に徹透す。而して我は地上の一微物、彼に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。

月は晩くして未だ上るに及ばず。仰いで蒼穹を觀れば、無数の星宿紛糾して、我が頭にあり。顧みて我が五尺を視、更に又内觀して我が内なるものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚く。不死不朽、彼と與にあり、衰老病死、我と與にあり。

鮮美透涼なる彼に對して、撓み易く、折れ易き我、如何に赧然たるべきぞ。こゝに於て、我は一種の悲慨に撃たれたるが如き心地す。聖にして熱ある悲慨、我が心頭に入れり。罵者の聲、耳邊にあるが如し。我が爲すなきと、我が言ふなきとを責む。我、起つて茅舎を出て、且仰ぎ、且俯して、罵者に答ふるところあらんと欲す。胸中の苦悶、未だ全く解けず。行く／＼秋草の深き處に至れば、忽ち聴く、蟲聲縷の如く、耳朶を穿つを。これを聽きて、我が心は一轉せり。再びこれを聽きて、悶心更に明らかかり。さきに苦悶と思ひしは、苦悶にあらざりけり。看よ、啣々として秋を悲しむが如きもの、彼に於て何の悲しみかあらん。彼を悲しむと看取せんか、我も亦悲しめるなり。彼を吟哦すと思はんか、我も亦吟哦してあるなり。心境一轉す

れば、彼も無く、我も無し。邈焉たる大空の、百千の提燈を掲げ出せるあるのみ。

我は歩して水際に下れり。浪白くして、萬古の響を傳へ、水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱きて蒼穹を察すれば、我、我を遺れ、飄然として檻樓の如き「時」を脱するに似たり。

茫茫乎たる空際は、歴史の醇の醇なるもの、ホーマーありし時、プラトニーありし時、彼の北斗は今と同じき光芒を放てり。同じく彼を照らせり、同じく我を照らせり。然り、人間の歴史は多くの夢想家を載せたりと雖も、天涯の歴史は、太初より今日に至るまで、大なる現實として残り。人間はこれを幽奥ミステリーとして畏るゝと雖も、大なる現實は、始より終まで、現實として

ホーマー
ギリシヤ最古
の叙事詩人
プラトニー
前127—前347
ギリシヤの哲
學者

残り。人間は或は現實を唱へ、或は夢想を稱へて、これを以て調和すべからざる要素の如く諍へる間に、天地の幽奥は依然として大なる現實として残り。

我は自ら答へて、安らかなる心を以て、蓬窓に反れり。我が視たる群星は、未だ念頭を去らず。靜かに、燈を剪つて書を讀まんとするに、我が心はなほ彼にあり。我が讀まんとする書は彼にあり。漠々たる大空は、思想の廣き歴史の紙に似たり。吁、悠々たる天地、限りなく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、これに對して暫く茫然たり。

(北村透谷集)

島村抱月

名は瀧太郎

評論家 新劇

運動家

島根縣の人

大正七年歿

年四十八

一四 自然主義の文學

島村抱月

文藝の目的は二つの極をもつ。一は快樂であり、一は實際的意義である。併しながら、これを總括していふ時は、文藝の歸趨はたゞ美にあること勿論であらう。即ち、快樂といひ、實際的意義といふも、畢竟美の成分としてのみ文藝の目的たり得る。されば、若しかやうな統一的目的から離れた、實際的意義のみを目的とした作品があつたならば、恐らくそれは文藝としては價值のないものであらう。即ち、それが道德を説くものであつたならば、修身書になり、教義を説くものであつたならば、説教集になり終るであらう。反對にまた、快樂のみを目的とした作品であつたならば、それはやがて講談落語の類

と選ぶ所がなくなるであらう。即ち、此の二者の何れを缺いても、それは既に文藝作品ではあり得ない。

然らば、此の両者が含まれてさへ居れば、それは直ちに藝術であるかといふに、さうでもない。此の両者がたゞ漠然同居してゐるだけでは、未だ藝術とはならぬ。快樂が其の作品の單なる講談的、落語的な性質から來り、實際的意義が其の作品の單なる修身書、説教集的な性質から來る如きは、往々にして、いはゆる應用文學の上に見るところであるが、かくの如きは、多くは文藝としてはいふに足りないものである。それが文藝であるためには、此の両者が是非とも融合してゐなくてはならぬ。即ち快樂であつても、それが何等かの意義を含んだものでなくてはならぬ。また實際的意義であつても、それ

が其のまゝ、快樂であり、懐かしく、忘れ難い底のものでなくてはならぬ。此の境を、吾人はまづ大まかに美と名づける。されば、美は一體であるが、其の意識を分解するときは、二元的傾向を有するといふのである。即ち、一方には快樂の度によつて作品に高下の品等をつけようとし、他方には實際的意義の深淺によつてこれを評價しようとする。而して、此の二つの標準は、絶えず交錯して作用する。實際に於ても、理論に於ても、これが古來の作品評價の真相である。併し、此の両者は往々相調和せずして、反動的に相消長することもある。或は又、名稱を更へ形を變じて、知らず識らず互に相抱合してゐることもある。

今、自然主義文藝の場合にこれをあてはめて考へると、其の

所謂眞も、此の意味に於て理解せられる。こゝでは畢竟實際的意義が眞といふ名を被つて快樂と相擁し、以て美の要求を全うせんとしてゐるのである。自然主義は決して、或人々の考へるやうに、文藝をして應用の門に降らしめたものではない。其の眞といふことを特に標榜するのは、在來の文藝が漸く套窩に陥つて、單なる空想の遊戯形似の遊戯たらんとするに對し、反動的に他の一面を提起して、文藝に實際的意義の加らざるべからざる所以を明らかにしたに過ぎぬ。更にこれを事實に近づけていへば、たゞ遊として人に娛樂を與へるに過ぎないやうな藝術は無意義であり、これに全力を傾倒する氣にはなれない。もつと文藝に嚴肅な意義を見出したいといふ要求から、人生の眞相を露呈せしめよう、科學の眞理を敷

衍しよう、社會問題を究明しようといふが如き實際的意義を標榜して來たに過ぎぬ。所詮、眞は美を完成する一材料たるに外ならぬ。美を有價值ならしめる範圍に於てのみ、眞は文藝上に價值を有する。

併し又、一轉して考へると、文藝を有意義ならしめ、嚴肅ならしめんがために眞を加へるのではなくて、逆に此の眞を發揮せずにはゐられない要求が發して、此の種の文藝となつたものとも解せられる。此の場合には、美は從となつて眞が主位に就く。美はたゞ眞を發揮するための方便に過ぎない。思ふに、此の二つの場合は、雙方とも事實であり、また眞理である。恐らく、同一の作者にあつても、此の兩者が交互に、若しくは同時に存し得るであらう。

凡そ、文藝の内容となるべき思想は、充實し熟してゐなくてはならぬ。たとひ、美の材料として眞を描く場合でも、其の眞が浮薄な未熟なものであつてはならぬ。必ず作者の胸中に十分に醗酵してゐなくてはならぬ。衷心から自分のものになつてゐなくてはならぬ。單なる一時の間に合はせや附焼刃であつてはならぬ。また、美を眞の方便とする場合にしても、それが誠の藝術家である限り、最初の動機の如何に拘らず、筆を執つて紙に臨んだ瞬間からは、藝術的態度に入らざるを得ない。即ち、己が個人として社會を思ひ、科學を慕ふ一念は、しばらく、其の方便として選んだ、眼前の材料を活寫せんとする一念に地歩を譲らざるを得ない。言ひかへれば、これをあくまで文藝の目的に随つて取扱はうとする、純一無雜な表現

境に入らねばならぬ。如何なる動機から生ずる文藝でも、結局美の一義に統括せられることに於て、二つはない。たゞ美の内容に變化があるのみである。世上往々審美上の醜と道德上の醜とを混同して、道德上の醜惡を描くことが直ちに美と背離するものであるかのやうに考へるが、それは誤である。美とは人間一切の現象を包容し得る文藝の終極點の名であつて、美を破るといふことは、文藝でなくなるといふことに外ならぬ。

然らば、かくすべての作品が其の内容に實際的意義を含むに拘らず、特に或種の作品のみが自然主義の名を以てよばれるのは何故であらうか。それは、其の藏する所の眞其のものの性質及び解釋に存すると見るのが當然であらう。何とな

れば、若し宗教問題の究明を目的とするもの哲學的眞理の敷衍を目的とするもの、乃至表面的世相の描寫を目的とするもの等があつても、それは自然主義の作品とはよばれないからである。

然らば、社會問題、科學の眞理、人生の暗黒面などといふ解釋の眞が何故に特に自然主義の名を蒙るに至つたであらうか。これに對する答は二つある。第一は所謂社會問題の文藝が、因襲道德及び現代文明に對して、特に其の反對の一面である所の自然素樸の態度を取出し、人をして一旦素手に立戻つた時の葛藤を想像せしめる。いはば、文明對自然の關係を描く。而して、文明は既にありふれたもの、自然は新に作者が掘り起したものであるため、注意はおのづから後者に集る。是、自然

主義の名のある所以である。第二は科學といひ、人生の暗黒面といひ、みな根柢に現實といふこと、しかも五官を通ずる物的現實といふことを取出し、理想的精神的といふことに對照せしめる思想を藏する。現實が如何に暗黒醜惡でも、それを隠蔽した人生圖は不眞實の人生圖である。我等が人生を考へようとするには、どうしてもこれを算中に入れなければ間違になる。かういふ方式で物的現實を揭示する所から、また自然主義の文藝と名づけられるのである。

(抱月全集)

岩城準太郎

國文學者

奈良女子高等

師範學校教授

富山縣の人

明治十一年生

三田文學

文藝雜誌

明治四十三年

五月創刊

白樺

文藝雜誌

明治四十三年

四月創刊

大正十二年九

月廢刊

一五 肯定觀の文學

岩城準太郎

明治の末年、所謂現實暴露を標榜する自然主義文學が盛に行はれてゐた頃、新に雜誌「三田文學」と「白樺」が發刊せられた。前者には享樂耽美の傾向があり、後者には理想的、人道的の傾向があつた。そして、それらの傾向は、享樂主義だの、耽美主義だの、人道主義だの、新理想主義だのと、種々の名稱のもとに攝せられるに至つたけれども、併しこれを通觀すると、何れも人生を肯定して、どうにか現在の狀態を切抜け、生活の意義を見つけようとしてゐる點に於ては、揆を一にしたものであつた。蓋し、此の考へ方は、此の世を否定して、どす黒い厭世觀に陥りたくはなく、又、絶望的な決定觀に押附けられるのにも満足

しないところから起つてゐるのであつて、そこに開かれ得る一方の血路は、どんな方法かによつて、人生を肯定することである。人生を肯定するといつても、昔からの所謂樂天觀に通有の空想的、夢幻的、回避的な肯定なら何の珍しいこともないのであるが、一旦否定しなければならぬやうな世相に面接して、其の暴露された醜さに戰慄した後に、それでもこれをどうにかしようとして立上つて來る肯定觀なら、眞に世路の辛酸を嘗めたものだけが持ち得る心境であつて、かなり複雑微妙な味に到達してゐるのである。

此の種の肯定觀の重みは、一旦否定觀を通過して來てゐるところに存する。随つて、それはやはり現實の實相に根柢を置いての考へ方であつて、明治文學の大道に外れない、現實重

視の文學である筈である。併し、當時實際に出現した此の種の文學は、此の點に於て稍物足りないものであつたことは否まれない事實であつて、今までどつしりした足並みで歩いて來た自然主義の文學に對して、更に一步を進めたものといふよりは、ともすればまだ自然主義の難所を踏みも見ない、甘いものだと思へるやうなものも無いではなかつた。併しながら、とにかくにも現實暴露の泥海から這ひ上つて來た史的地位に立つものである點に於て、將來の發展を期待することの出来るものであつた。

これらの文學に比べると、一見甚だしく性質がちがつてゐるやうに見えて、實は其の根柢に自然主義的文學と反對の人生觀を抱く點に於て、相通ずる一種の文學があつた。それは

夏目漱石
名は金之助

英文學者 小

説家

東京市の人

大正五年歿

年五十

子規派

正岡子規を中

心とした和歌

俳句の流派

吾輩は猫である

明治三十八

三十九年作

坊ちゃん

明治三十九年

作

草枕

明治三十九年

作

それから

明治四十二年

作

明暗

大正五年作

夏目漱石及び其の一派の文學である。

漱石は本來子規派の俳人であつたが、明治三十八年、始めて散文の作家として現れた。現れると直ぐに、「吾輩は猫である」と題する小説ともつかず隨筆ともつかぬ長篇を出して、一躍文壇に重きをなした。爾來、「坊ちゃん」や「草枕」の短篇を経て、四十二年「それから」等の長篇に移り、大正五年、「明暗」を未完成のままにして歿するに至るまで、長短の小説隨筆を出して、大きな足跡を斯道の上に遺したのである。漱石の作に見える人生は、やはり自然主義的の文學に現れたやうな苦悶の人生である。併しながら、其の人生に於ける生き方は、其のいやな世の中にこびりついて苦悶を續けるのではない。一度は此の境界を脱却してこれを客觀し得る心境を作り、更に此の世の中

に歸り住んで、其の超越の態度で人生を味ははうとするのである。だから人生に對するに愛憎の差別を現さない。悠々とした餘裕があつて、何物にも拘泥しない廣さが感じられる。當時は自然主義的文學の全盛時であつたために、此の餘裕のある態度がひどく異彩を放つて、文壇を驚かしたのであつた。世間では、此の態度を評して俳諧的といつた。それは當つてゐる。人間の生死問題や自己の煩悶苦患をも、月花と同じに眺め得る點は俳諧的である。例へば重病に苦しむ、困憊の極に達する、其の心持を文學に作る、其の瞬間に文學的解脱の境に入るのである。又例へば、世の中は不合理に出來てゐて、持つて生まれた正義感を満足せしめない。利欲の肉塊、名聞の臭骸、何れを見てもいやになる。これを舞臺上の喜劇を見る。

る氣持で眺める。其の刹那、其のいやな味から解放せられるのである。此の觀方は即ち俳諧に立脚したもので、江戸時代の俳諧に比べると甚だしく嚴肅味を加へてはゐるが、やはり芭蕉の建立した世界を近代的にしたものといふことが出来る。

世間では又これを回避的だといつたが、それは當らない。眞正面から人生にぶつつかつて其の苦悶を経験するやうなことは、既に自然主義的文學の方で十分爲し盡くしてゐる。今更其の中へ飛びこむ要もなく、さればといつて回避することもいらぬ。恐れず、憎まず、一段の高所からこれを包容愛撫しようといふのである。人生の實相は醜であるにしても、これを醜として暴露することはもう濟んでゐる。これがある

がまゝに受取つて、其の總べてを包容し、十分の餘裕を以て此の生を味ははうとするのである。だから、回避的といふよりは、むしろ低徊的といふ方が當つてゐる。

漱石が「それから」を出し「門」を出した時、自然主義風に變つたと言つた批評家があつたけれども、それは此の肯定的態度を見逃したための誤である。これは東洋風の、特に日本的の對人生の態度であつて、新理想主義とか、新浪漫主義とか、人道主義とか、總べて西洋文學に見られるイズムの名稱をこれに當てはめようとするのは無理であるが、絶望せず、やけにならず、靜かに生の味はひに徹しようとするところは、正に肯定觀の文學である。而して、肯定觀の文學としては、大正の初頭までに出たものの中で最も特色のある、又最も見ごたへのあるも

門
明治四十三年
作

のであつた。それは現實のどん底を見極めて來てから、さてこれを振返つて眺める境地に立つてゐるからで、即ち自然主義的の難所を經過して來てゐるからである。

此の文學は、明治の終に芽を出したものであるが、大正に入つて益、成長して來て、自然主義的文學が行き詰つた頃からは自らこれに代るやうな形勢になり、一部の批評家や作家が自然主義的の立場から烈しく非難し擯斥したに拘らず、青年讀者の同情を集めて漸次文壇の大樹と繁茂したのである。

(明治大正の國文學)

夏目漱石
 名は金之助
 英文學者 小
 説家
 東京市の人
 大正五年歿
 年五十

一六 秋露

夏目漱石

子供の時家に五六十幅の畫があつた。或時は床の間の前で、或時は藏の中で、又或時は蟲干の折に、余は交るゝそれを見た。さうして懸物の前に獨り蹲踞うつくまつて、默然と時を過すのを樂しみとした。

畫のうちでは彩色を使つた南畫が一番面白かつた。惜しい事に、余の家の藏幅には其の南畫が少かつた。子供の事だから、畫の巧拙などは無論分からう筈はなかつた。好き嫌いと云つた所で、構圖の上に自分の氣に入つた天然の色と形が表れてゐれば、それで嬉しかつたのである。

鑑識上の修養を積む機會を有たなかつた余の趣味は、其の

後別段に新しい變化を受けないで生長した。随つて、山水によつて畫を愛するの弊はあつたらうが、名前によつて畫を論ずるの譏も犯さずに濟んだ。丁度畫と前後して余の嗜好に上つた詩と同じく、如何な大家の筆になつたものでも、如何に時代を食つたものでも、自分の氣に入らないものは一向顧みる義理を感じなかつた。

或時、青くて圓い山を向ふに控へた、又的礫と春に照る梅を庭に植ゑた、又柴門の眞前を流れる小河を垣に沿うて緩く繞らした家を見て——無論畫絹の上に——どうか生涯に一遍で好いからこんな所に住んで見たいと、傍にゐる友人に語つた。友人は余の眞面目な顔をしげ／＼眺めて、君こんな所に住むと、どの位不便なものだか知つてゐるか」と、さも氣の毒さ

うに云つた。此の友人は山國の生まれであつた。余は成程と始めて自分の迂闊を愧づると共に、余の風流心に泥を塗つた友人の實際的なのを悪んだ。

それは二十四五年も前の事であつた。其の二十四五年の間に、余も已むを得ず、其の友人の様に次第に實際的になつた。崖を降りて溪川の水を汲みに行くよりも、臺所へ水道を引く方が好くなつた。けれども、南畫に似た心持は時々夢を襲つた。殊に病氣になつて仰向けに寝てからは、絶えず美しい雲と空が胸に描かれた。其の位病中の余は自然を懐かしく思つてゐた。

空が空の底に沈み切つた様に澄んだ。高い日が蒼い所を目の届くかぎり照らした。余は其の射返しの大地に洽き内

に、しんとして獨り溜もつた。さうして眼の前に群る無數の赤蜻蛉を見た。さうして日記に書いた。「人よりも空、語よりも黙。……肩に来て人懐かしや赤蜻蛉。」

是は東京へ歸つた以後の景色である。東京へ歸つたあと、暫くは、絶えず美しい自然の畫が、子供の時と同じ様に、余を支配してゐたのである。

秋露下南磧。 黃花祭照顏。 欲行沿澗遠。 却得與雲還。

山を分けて谷一面の百合を飽く迄眺めようと心に極めた翌日から床の上に仆れた。想像は、其の時、限りなく咲き續く白い花を基石の様に點々と見た。それを小暗く包まうとする緑の奥には、重い香が沈んで、風に揺られる折々を待つ程に、

葉は息苦しく重なり合つた。——此の間、宿の客が山から取つて来て瓶に挿した一輪の白さと大きさと香りから推して、余は有るまじき廣々とした晝を頭の中に描いた。

聖書にある野の百合とは今云ふ唐菖蒲の事だと、其の唐菖蒲を床に活けて置いた時、始めて芥舟君から教はつて、それではまるで野の百合の感じが違ふ様だがと話し合つた一月前も思ひ出された。聖書と關係の薄い余にさへ、檜扇を熱帶的に派手に仕立てた様な唐菖蒲は、深い沈んだ趣を表すには餘り強過ぎるとしか思はれなかつた。唐菖蒲はどうでもよい。余が想像に描いた幽かな花は、一輪も見ることのないうちに立秋に入つた。百合は露と共に摧けた。

人は病むものの爲に裏の山に入つて、此處彼處から手の届

芥舟君

畔柳芥舟

名は都太郎

英文學者

第一高等學校

教授

山形市の人

大正十二年歿

年五十三

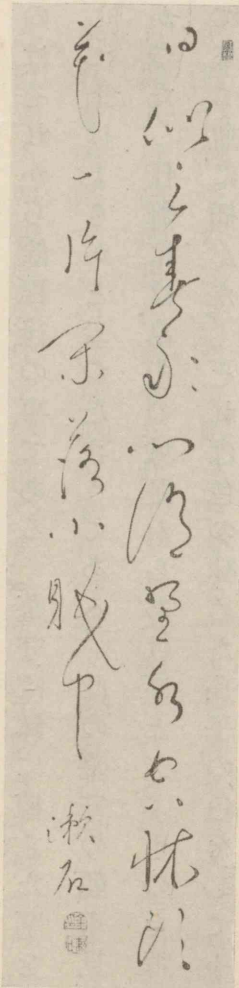
く幾莖の草花を折つて來た。裏の山は余の室から廊下傳ひにすぐ上る便りのある位近かつた。障子さへ明けて置けば、寝ながら縁側と欄間の間を埋める一部分を鼻の先に眺める事も出來た。其の一部分は岩と草と、岩の裾を縫うて迂回して上る小徑とから成立つてゐた。余は、余の爲に山に上るものの姿が、縁の高さを辭して欄間の高さに達する迄に、一遍影を隠して、又反對の位置から現れて、遂に余の視線の外に没して仕舞ふのを、大いなる變化の如くに眺めた。さうして同じ彼等の姿が再び欄間の上から曲折して下つて來るのを疎い眼で眺めた。彼等は必ず粗い縞の貸浴衣を著て、日の照る時は手拭で頬冠りをしてゐた。岨道を行くべきものとも思はれない其の姿が、花を抱へて岩の傍にぬつと現れると、一種芝

居にでも有りさうな感じを病人に與へる位釣合が可笑しかつた。彼等の探つて來て呉れるものは色彩の極めて乏しい野生の秋草であつた。

或日、しんとした眞晝に、長い薄が疊に伏さる様に活けてあつたら、何時何處から來たとも知れない蟋蟀がたつた一つ、おとなしく中程に宿つてゐた。其の時薄は蟲の重みで撓ひさうに見えた。さうして袋戸に張つた新しい銀の上に映る幾分かの緑が、暈した様に淡く且不明に眸を誘ふので、尙更運動の感覺を刺戟した。

薄は大概すぐ縮れた。比較的長く持つ女郎花さへ、眺めるには餘り色素が足りなかつた。漸く秋草の淋しさを物憂く思ひ出した時始めて蜀紅葵とか云ふ燃える様な赤い花瓣を

見た。留守居の婆さんに錢を遣つて「もつと折らせろ」と云つたら、錢は要りません。花は預りものだから上げられません」と斷つたさうである。余は其の話を聞いて、どんな所に花が咲いてゐて、どんな婆さんがどんな顔をして花の番をしてゐるか、見たくて堪らなかつた。蜀紅葵の花片は燃えながら翌日散つて仕舞つた。



夏目漱石筆蹟

桂川の岸傳ひに行くといくらでも咲いてゐると云ふコスモスも、時々病室を照らした。コスモスは總べての中で最も

桂川
静岡縣田方郡
の西部に發源
し同郡修善寺
町を貫流して
狩野川に入る

源範賴
 建久四年（一八五三）修善寺に於て自殺
 畠山の城趾
 足利義詮の臣
 畠山道誓の城趾
 修善寺町の北方城山に在る

單筒で且長く持った。余は其の薄くて規則正しい花片と、空に浮かんだ様に超然と取合はぬ咲き工合とを見て、コスモスは干菓子に似てゐると評した。「何故ですか」と聞いたものがあつた。範賴の墓守の作つたと云ふ菊を分けて貰つて來たのは、それから餘程後の事である。墓守は鉢に植ゑた菊を貸して上げようかと云つたさうである。此の墓守の顔も見なかつた。仕舞には畠山の城趾からあげびと云ふものを取つて來て瓶に挿んだ。それは色の褪めた茄子の色をしてゐた。さうして其の一つを鳥が啄いて空洞にしてゐた。——瓶に挿す草と花が次第に變るうちに、季節は漸く深い秋に入つた。

日似三春永。心隨野水空。牀頭花一片。閑落小眠中

（漱石全集）

森鷗外

名は林太郎
 小説家 劇作家

文學博士
 陸軍軍醫總監
 帝室博物館總長兼圖書頭
 島根縣の人
 大正十一年歿
 年六十一
 高瀬川
 加茂川の分水
 賀茂川と宇治川とを連ねる
 角倉了以開鑿
 慶長十九年
 （二二七四）竣
 成

一七 高瀬舟

森 鷗 外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されるのであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にある同心で、此の同心は、罪人の親類の中で主立つた一人を、大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事では無いが、所謂大目に見るのであつた。黙許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盜をするために、人を殺し

火を放つたと云ふやうな、獯惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得違のため、想はぬ科を犯した人であつた。

さう云ふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ、東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。此の舟の中で、罪人と其の親類の者とは夜どほし身の上を語り合ふ。いつも悔んでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚、眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。所詮、町奉行の白洲で表向きの口供を聴いたり、役所の机の上で口書を讀んだりする役人の、夢にも窺ふことの出来ぬ境遇である。

賀茂川
現京都府愛宕
郡に發源し京
都市を貫流し
て淀川に入る

白河樂翁
松平定信
陸奥國(福島
縣)白川藩主
將軍家齊の輔
佐
文政十二年
(一四八九)歿
年七十二
寛政
光格天皇の御
代の年號(二
四四九―二四
六〇)
知恩院
現京都市東山
區林下町に在
る淨土宗の總
本山

同心を勤める人にも、いろ／＼の性質があるから、此の時唯うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみ／＼と人の哀を身に引受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて、非常に悲惨な境遇に陥つた罪人と其の親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになる、其の同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつただらう。知恩院の櫻が入相の

鐘に散る春の夕に、これまで類の無い、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼び出されるやうな親類は無いので、舟にも只一人で乗つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乗り込んだ同心羽田庄兵衛は、唯喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、この瘦肉の、色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けられるやうな、温順を装つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして、舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動に細かい注意をしてゐた。

其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が月の輪郭をかすませ、やう／＼近寄つて来る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、唯舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に随つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。其の額は晴れやかで、目には微か

下京
ほと現京都市
下京區の地

な輝がある。

庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにゐる。そして、不思議だ、不思議だと、心の内で繰返してゐる。それは、喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねが無かつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさに思はれたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまで此の高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし、載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それに此の男はどうしたのだらう。遊山船にでも乗つたやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よし

や其の弟が悪い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。此の色の蒼い瘦男が、その人の情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや、それにしても何一つ辻褃の合はぬ言葉や舉動が無い。此の男はどうしたのだらう。庄兵衛には喜助の態度が考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして庄兵衛はこらへ切れなくなつて呼び掛けた。「喜助。お前何を思つてゐるのか。」

「はい」と云つてあたりを見廻した喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直し

て庄兵衛の氣色を窺つた。

庄兵衛は、自分が突然問を發した動機を明かして、役目を離れた應對を求め、分疏いひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。「いや、別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己おれは先刻さつからお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分いろ／＼な身の上の人だつたが、どれも／＼島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て一しよに舟に乗る親類のものと、夜どほし泣くに極つてゐた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。「御親切に仰しやつて下さつて、有

難うございます。なるほど島へ往くと云ふことは、外の人に
は悲しい事でございませう。其の心持はわたくしにも思ひ
遣つて見ることが出來ます。しかしそれは世間で樂をして
ゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではござい
ますが、其の結構な土地で、これまでわたくしのいたして參つ
たやうな苦しみは、どこへ參つても無からうと存じます。お
上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいませう。島はよし
やつらい所でも、鬼の栖む所ではございませうまい。わたくし
はこれまで、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがご
ざいませんでした。今度お上で島にゐると仰しやつて下さ
います。其のゐると仰しやる所に、落著いてゐることが出來
ますのが、先づ何よりも有難い事でございます。それにわた

くしはこんなにかよわい體ではございますが、つひぞ病氣をいたしたことはございせんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、體を痛めるやうな事はあるまいと存じます。それから今度島へお遣り下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。かう云ひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百文を遣はすと云ふのは、當時の掟であつた。喜助は語を續いだ。「お恥づかしい事を申し上げなくてはなりませんぬが、わたくしは今日まで二百文と云ふおあしを、かうして懐に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きました、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた

錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それ、現金で物が買つて食べられる時は、工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又後を借りたのでございます。それがお牢に入つてからは、仕事をせず、食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりました。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文は使はず持つてゐることが出来ます。おあしを自分の物にして持つてゐると云ふことは、わたくしに取つては、これが始でございませぬ。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出来るかわかりませんが、わたくしは此の二百文を島でする仕事の元手にしよう

と楽しんでをります。」かう云つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は「うん、さうかい」とは云つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出来ずに、考へ込んで黙つてゐた。

庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になつてゐて、もう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云はれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は、自分が役目のために著るものの外、寝巻しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕な家にかはいがられて育つた癖があるので、夫が満足する程手元を引締めて暮して行

くことが出来ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内證で里から金を持つて來て帳尻を合はせる。それは夫が借財と云ふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は、五節供だと云つては里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては里方から子供に衣類を貰ふのでさへ心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を填めて貰つたのに氣が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうなことの無い羽田の家に、折々波風の起るのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上を我が身の上へ引比べて見た。喜助は、仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して無くしてしまふと云つた。いかにも哀れ

な、氣の毒な境界である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちは無いのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持はこつちから察して遣ることが出来る。しかしいかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは、喜助の慾の無いこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦しんだ。それを見附

けさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やう／＼口を糊することの出来るだけで満足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るにそこに満足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうし

ようと云ふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取り出して来て穴埋めをしたことなどが分ると、此の疑懼が意識の闕の上に頭を擡げて來るのである。

一體此の懸隔はどうして生じて來るだらう。唯うはべだけを見て、それは喜助には身に係累が無いのに、こつちにはあるからだと云つてしまへばそれまでである。しかしそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。此の根柢はもつと深い所にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は唯漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此の病が無かつたらと思ふ。其の日其の日の食が無いと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備

へる蓄が無いと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其の蓄がもつと多かつたらと思ふ。かくの如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏み止ることが出来るものやら分からない。それを今日の前で踏み止つて見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。

庄兵衛は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此の時庄兵衛は、空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。

(鷗外全集)

久松潜一

國文學者

文學博士

東京帝國大學

教授

愛知縣の人

明治二十七年

生

一八 國文學の精神

久松潜一

國文學の精神とは何であるか。從來やゝもすれば、それは單に優美な所謂月花を遊ぶことに過ぎないかのやうに解されてゐる。國文學の全般を通じて見るに、かくの如き方面の存してゐることは勿論否定出來ないが、それよりもつと廣い、もつと生活的意味のある他の方面の存することも亦見逃すことが出來ない。私は國文學を流れる最も著しい精神として、「まこと」と「ものあはれ」と「幽玄」との三つをあげたい。私にはこの三つが主要な國文學の精神であり、その本質であるとさへいふことが出来るやうに思はれる。

第一に「まこと」とは、あるがまゝのものをあるがまゝに表現

する精神である。これは何よりも上古文學を貫ぬく精神であつて、これを内容的思想的方面から見ると、そこに強い國家的な精神と、個人的な精神とが現れてゐる。

國家的精神は、古事記を中心として見られる所であつて、國家も宇宙も人類も神によつて作られたといふ如く、すべて神を中心として見る精神である。神にはアニミズム的な精靈もあれば、神人同格的な自然神もあり、英雄神的な人格神もあれば、祖先神的な人格神もあるが、何れにしても、それは自己より偉大なものであつて、その神によつて生きるのが古代人の眞實な精神であり、それがそのまま表現せられたのが古事記である。

一方個人的精神は、萬葉集を中心として現れてゐる。もと

アニミズム
萬物萬象に靈
魂の存在を認
めてこれを崇
拜する原始的
な思考態度

人麿
柿本人麿
藤原朝の歌人

より萬葉集にも國家的な意識も見えるけれども、その中心をなすものは個人的精神である。人麿が皇子の薨去を悼み奉つた歌にしても、國家の建設を説き、神をうたつてはゐるが、その中心はやはり皇子の薨去を悼み奉る彼自身の哀痛の感情にある。即ち、國家的觀念を背景として、個人的な抒情的精神を現してゐるのである。かくて、個人的精神から出發してゐる萬葉集の感情や觀念は、一方には自然に對してひたすらな愛を向け、自然のうちに身を投げ入れて、そこに自然と一つになつた境地を示してゐる。が、一方には又人生に對する情熱的な愛をうたひ、現實をよりよく生きてゆかうとする精神も見えるのである。

この素樸な「まこと」の感情を中心とする上代人の物の見方

は、第一、一元的綜合的であつて、彼等は自己の中に神を顯現せしめ、自然の中に自己を見出してゐる。第二、率直で積極的である。單純で、紆餘曲折がない。遠慮もなければ、かみもなく、思ふまゝ、欲するまゝに進んで行く。第三、具象的である。歌を詠むにも、目にふれた事象をまづ歌ふ。對象をあるがままに直觀し、それを直接的に表現する。

而して、この精神はこの後に於ても國民生活の基調をなすものであつて、いつの時代にも文學が爛熟期、廢頽期に陥ると、常に復古的精神として現れ來つてゐる。

人間が現實生活のはかなさ、醜さに悩む時、ひたすら素樸性と眞實性を求めるのは、即ち童心にかへることに外ならない。それは文化の展開、文學の發達に於ける窮極ではなくて、

嚴肅な第一歩である。この「まことの精神が、常に力強い雄々しいますらをぶりの精神となつて、國文學の流れの中に持續的に流れてゐるのである。

第二に「ものあはれ」とは「もの」の中に見出された「あはれ」の精神である。あるがまゝのものの上に見出された、あるべき世界である。それは又、心と形との調和の中に見出される情趣の世界であるともいへよう。本居宣長は「ものあはれ」を源氏物語の基調であり、平安時代文學の根本であるとしてゐる。それは上古文學の中に見出される素樸な感情ではなく、それをあくまで洗練した境地である。「あはれ」は、發生的にいへば、悲哀ではなく、悲しみの場合にも喜の場合にも共通な「あ」といふ感動である。高天原の岩戸の前の神樂に「あはれ、あ

源氏物語
五十四帖
平安朝中期に
成つた物語
紫式部作

なおもしろ、あなたのし」とある「あはれ」はそれである。随つて、それは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕のさびしさの感情にも見出される精神であるが、何れかといへばしんみりとした情趣を主とし、そこから悲哀の情趣ともなるのである。

この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。

今、「ものあはれ」の意識の展開を見るに、最初は限定されない「もの」の上に、自由に「あはれ」を創造したのに對して、次第に「あはれ」が固定し、觀念化されて、その固定し、觀念化された「あはれ」を以て「もの」を見るやうになつた結果、「もの」が次第に限定されるに至つた。かくて、「あはれ」と「もの」とが著しく限定され特殊化されたものとなり、それだけ、自由な生き／＼とした「もの」と「あはれ」とが失はれて來たやうである。

平家物語
十二卷（流布本）
鎌倉時代初期
に成った軍記
物語
作者未詳

このものあはれ」の精神は、中古文學のみではなく、中世文學の上にも流れてゐる。平家物語は敘事詩的な物語であるが、それを貫ぬいて流れるものはやはりこの精神である。否、むしろ軍記物語には英雄的敘事的精神と、ものあはれを主潮とする抒情的精神とが互にもつれあつて、そこに花やかな勇壯な悲壯美を形づくつてゐるといふ方が至當であらう。

この境地は、更に近世に至つて大きな流れとなつて現れてゐる。先づ、近世の擬古文脈を始めとして、宣長の物語論和歌に於ける新古今主義等、何れもこの精神を中心とするものである。かく見來るときは、「ものあはれ」の精神は、中古文學以來絶えず國文學の中に流れてゐた主要な精神の一つであるといふことが出來よう。

古今集

古今和歌集

二十卷

勅撰集の第一

延喜五年（一

五六五）撰進

撰者紀貫之

外

四人

俊成

藤原俊成

皇太后宮大夫

歌人

千載集の撰者

元久元年（一

八六四）歿

年九十一

夕さればの歌

千載集

第三に「幽玄」の精神について考へて見たい。古今集の眞名序に「或事關神異、或興入幽玄」とあつて、その本來の意味は、ものあはれ」とほゞ同様で、形象として表される繊細な情趣をさしてゐる。言外の景氣や餘情を重んずる所に、象徴的な性質を有する。「幽玄」の精神を殊に重んじた俊成の「幽玄」も、能樂の「幽玄」もこの點に共通する。しかも、その時代の宗教的な考、並びに平安末期に於ける轉變極まりなき現實のはかなさは、特に無常觀を深め、ために「幽玄」の境地も物寂しさを主とするやうになつた。俊成が彼の最も得意な歌として、夕されば野邊の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里を擧げたと傳へられる點から見ても、「幽玄」の中心をなすものは、秋の夕ぐれの寂しさのやうな境地であつたことが知られる。西行が自然

の中に放浪することによつて見出して來たものもそれである。美しく咲く櫻の花かげにひそむ静けさ寂しさを見出たのが西行であつた。而してこの「幽玄」は、俊成のよくいふ「とほじろい即ち壯大といふ感情と、心が細かい即ち纖細といふ情趣とを統一した所に見出される精神である。

更に一步を進めて表現の點から考へるに、この精神はあるがまゝの心持をあるがまゝに現さうとするよりは、あるがまゝのもの、あらうとするものをば一つの型に入れて表現しようとするものであつて、中世の人々が個人を否定して「家」に生き、個性を否定して普遍性に生きようとしてゐる精神と一致するものがある。大きい自由な精神を、型といふ窮屈な狭いものの中に入れて、それを凝縮せしめ結晶せしめて、そこから、

水晶のやうな透明なものを作り出さうとする。そこに小さい我が否定せられて、大きな自我が現れて來る。これが「幽玄」に外ならぬ。茶道に於て、小さい茶室の中に自由な境地を見出し、庭園藝術に於て、一本の樹、一箇の石によつて深山を象徴し、文人畫に於て、一本の線によつて限りない餘情を暗示し、潑刺たる氣韻を生動せしめてゐるのもこれに外ならない。

その他、室町藝術の代表ともいふべき能樂が、一つの型の中にいかに複雑な人間性を生かし得てゐるか。この精神は更に宗教的神祕的精神とも結びつき、表面に現れない美しさ、小さいものの中にふくまれた限りない大きさを成立させた。それが「幽玄」の精神である。

而して、この「幽玄」は、近世に於ては芭蕉の閑寂となり、あるが

高く心を云々
三冊子にある
語

まゝの自然の奥深く入ることによつて、そこに彼の所謂「さび」を見出してゐる點に於て、「まこと」の精神から更に深く入つてゐるといへよう。「高く心をさとりて俗にかへるべし」といふのは、生活を「さび」化し、幽玄化することであると解せられる。かくの如くして、自然と人生との窮極である「さび」や「幽玄」は、また藝術の窮極でもあつたのである。「匂」や「細み」や「しをり」を重んじた彼の俳諧は、實に「さび」の藝術であり、「幽玄」の藝術であつた。かくて、自然と人生と藝術とを貫ぬいて流れる「さび」、即ち「幽玄」が芭蕉の精神であるといへよう。

これを要するに、「まこと」は、あるがまゝのものに理念を見出した境地であり、もののはれは、あるがまゝのものの中からあらうとするものを見出した境地であり、更に自然と人生と藝術とを結びつけて、それにいぶしをかけて、統一せしめ結晶せしめた白光の如き境地が「幽玄」であるといへよう。

かくの如く見來る時、「まこと」ともののはれと「幽玄」とは、一見異なつた理念のやうであるが、しかしそれは本質的な相違ではなく、一つの日本的なものの展開に於けるそれ／＼の過程に外ならぬ。「まこと」が童心と素樸との藝術を生み、もののはれが心と形との調和融合した藝術を成し、「幽玄」が自然や人生を型の中に入れて、更に結晶した白光として表さうとする象徴的な藝術を生み出してゐる。而して、この展開しつつある精神を明らかにする所に、國文學の本質が見出されはしないだらうか。

(上代日本文學の研究)

西田幾多郎
哲學者

文學博士

京都帝國大學

名譽教授

帝國學士院會

員

石川縣の人

明治三年生

愚禿親鸞

俗姓日野

淨土眞宗の祖

弘長二年（一

九二二）歿

年九十

一九 愚禿親鸞

西田幾多郎

余は眞宗の家に生まれ、余の母は眞宗の信者であるに拘らず、余自身は眞宗の信者でもなければ、また眞宗に就いて多く知るものでもない。たゞ、親鸞聖人が在世の時、自ら愚禿と稱し、此の二字に重きを置かれたといふ話から、余の知る所を以て推すと、愚禿の二字は能く聖人の人となりを表すと共に、眞宗の教義を標榜し、兼ねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。

人間には智者もあり、愚者もあり、徳者もあり、不徳者もある。併しいかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人間の徳は人間の徳である。三角形の邊はいかに長くとも、總べての



（影御の鏡）人聖鸞親

角の和が二直角に等しいといふには何の變りもなからう。たゞ翻身一回、此の智、此の徳を捨てた所に、新たな智を得、新たな徳を具へ、新たな生命に入ることができるのである。これが宗教の神髄である。

宗教のことは、世の所謂學問・知識とは何等の交渉もない。コペルニクスの地動説が眞理であらうが、ブトレミーの天動説が眞理であらうが、さういふことはどちらでもよい。徳行の點から見ても、宗教は自ら徳行を伴ひ來るものであらうが、必ずしも此の兩者を同一視することは出來

コペルニクス
1473—1543
ポーランドの
天文學者
ブトレミー
ギリシャの天
文學者・地理
學者
二世紀頃の人

融禪師
法融禪師
支那唐代の禪
僧
四祖大師の弟
子
牛頭禪の創始
者
牛頭山
現中華民國江
蘇省に在る
牛頭山幽棲寺
の寺界
四祖大師
大醫道信
唐代の禪僧
支那禪宗第四
世の祖

ぬ。昔、融禪師がまだ牛頭山の北巖に棲んでゐた時には、色々の鳥が花を銜んで供養したが、四祖大師に參じてからは、鳥が花を銜んで來なくなつたといふ話を聞いたことがある。宗教の智は智そのものを知り、宗教の徳は徳そのものを用ひるのである。三角形の幾何學的性質を究めるには紙上の一小三角形で澤山であるやうに、心靈上の事實に對しては英雄豪傑も匹夫匹婦と同一である。たゞ眼は眼を見ることが出來ず、山にある者は山の全體を知ることが出來ぬ。此の智、此の徳の間に頭出頭没する者は、此の智、此の徳を知ることが出來ぬ。何人であつても、赤裸々な自己の本體に立返り、一たび懸崖に手を撒して絶後に蘇つた者でなければ、これを知ることが出來ぬ。即ち深く愚禿の愚禿たる所以を味はひ得たもの

彌陀
阿彌陀佛
無量壽佛・廿
露王如來
西方淨土の教主
歎異抄
一卷
淨土眞宗の典籍
親鸞の法語を本として他力信仰の教旨を説いた書

のみがこれを知ることができるのである。聖人の愚禿はかくの如き意味の愚禿ではなからうか。他力といはず、自力といはず、一切の宗教は此の愚禿の二字を味はふことに外ならぬのである。

併し、右のやうにいへば、愚禿の二字は獨り眞宗に限つた譯でもないやうであるが、眞宗は特に此の方面に著目した宗教である。愚人・悪人を正因とした宗教である。絶對的愛・絶對的他力の宗教である。いかなる愚人、いかなる罪人に對しても、彌陀はたゞ「汝の爲に我は粉骨碎身せり」といつてこれを迎へられるのが、眞宗の本旨である。歎異抄の中に、聖人が、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」といはれたのが、其の極意を示したものであらう。

日蓮上人
 俗姓貫名
 日蓮宗の開祖
 弘安五年（一
 九四二）歿
 年六十一
 北條氏
 鎌倉幕府の執
 權家
 吉水一門
 浄土宗の開祖
 法然の門徒

終りに、宗祖其の人の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣冲天、他宗を罵倒し、北條氏を目して、小島の主等が云々と壯語したのに比べて、吉水一門の奇禍に連なり、北國の隅に流されながら、「若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん」といつて、法を見て人を見なかつた親鸞聖人の人格は、頗る趣を異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤澎湃の間に立つて、動かざること巖の如き日蓮上人の意氣は、壯なことは壯であるが、煙波渺茫、風靜かに波動かざる親鸞聖人の胸懷は、また何となく奥床しいではないか。

（思索と體驗）

二〇 生涯稽古

世阿彌元清は、わが中世が生んだ最も偉大な藝術家の一人で、父觀阿彌清次と共に能樂を大成し、日本文化史の上に不朽の足跡を留めた、不世出の天才であつた。

世阿彌が能役者として傑出してゐたことは久しく言ひ傳へられてゐた所であり、又能作者として勝れてゐたことは、現行謡曲中の傑作の大部分が彼の作とせられてゐることによつても、ほゞ知られてゐた。然るに、明治四十一年、能樂に關する彼の遺著十數部が新に發見せられたことによつて、更に彼が卓越した批評家であり、偉大な「人間」であつたことが明らかにせられて來た。

世阿彌元清
 秦元清
 能役者 能作
 者
 觀世大夫第二
 世
 嘉吉三年（二
 一〇三）歿
 年八十一
 觀阿彌清次
 能役者 能作
 者
 觀世大夫第一
 世
 元中元年（二
 〇四四）歿
 年五十二

今、その遺著について見るに、彼の能樂論の根幹をなすものは、稽古論であるといつてもよく、しかも、それは句々、彼の稽古の實際から成果した深い體驗と自覺の記録であつて、國民生活史上稀に見る意義深い文字である。

彼の稽古論の基底をなすものは、花傳書の序にある、非道行「ずべからず」の一句によつて示されてゐる、一道集中の精神である。彼がこゝにいふ非道とは、同書中に「諸道諸事を打置き、當藝ばかりに入部して」といつてゐることによつても明らかやうに、背道徳を意味するものではなくて、専門以外の諸道をさすものである。彼の能藝に對する崇敬と眞摯さとは、能藝以外を敢へて「非道」とよんで、その生活の中からこれを拒斥しなくてはやまぬまでに至つてゐる。

花傳書
風姿花傳
能樂傳書
世阿彌元清著

この一道集中の精神は、更に、

惣じて、即座に限るべからず。日々夜々、行住坐臥にこの心を忘れずして、定心につなぐべし。かやうに油斷なく工夫せば、能いやましなるべし。

といふ如き念々相續の工夫となり、一切處一切時の生活を稽古の精神によつて規定しようとしてゐる。かくて、稽古は單なる舞臺上のことではなくて、全生活の問題たるに至つたのである。彼が古人に學んで三重戒を立て、自ら逸樂遊興を禁じて生活の放漫を戒めると共に、稽古は強かれ、諍議はなかれといつて、慢心や負け惜しみの如き内心の束縛を脱し、謙虚以て稽古の徹底をはからうとしたのは、この所以に外ならぬ。かくして、彼に於ては、能藝は單なる技術ではなく、また單な

る職務でもなく、更に深く道德性に徹した「道」そのものであつた。しかも、他の一切を「非道」として捨離せしめねば止まぬ、唯一の「道」であつた。彼の遺著の到る處に横溢してゐる研ぎ澄まされた藝道意識は、かくの如く、その全生活を稽古とし、全心身を藝術そのものたらしめようとした、彼の生活を背景としてのみ理解せられるものである。

彼にあつては、かく、横に生活の全面に互る稽古は、更に又、縦に全生涯に通ずる稽古でなければならなかつた。「花傳書」の第一に置かれてゐる「年來稽古條々」はこれを説いたもので、その量からいへば僅かに數頁の小篇に過ぎないけれども、これを熟讀玩味すれば、言々、一道の奥に達した人の深い體驗と自覺の披瀝であつて、單に能役者に對する適切な指針たるのみ

ならず、眞に人生を生きようとする者への意義深い案内書でもある。

本篇の内容は、七歳・十二三歳・十七八歳・二十四五歳・三十四五歳・四十四五歳・五十有餘歳の七項に分かつて、各年齢に於ける心理的並びに身體的な特質と、それに應じた稽古の覺悟及び方法を述べたものである。彼によれば、特に藝の發展を示すのは、少年期・壯年期・老年期の三期であつて、少年期の藝は自然的純眞性に於て、壯年期の藝は發展的充實性に於て、その美を發揮する。しかしこれらは、年齢の経過と共に失はれて行く「時分の花」に過ぎない。ところが老年期の藝になると、既にかくの如き身體的優越から來る美や力は失はれるが、眞に稽古しぬいた人の藝に於ては、長い年月に互る稽古に即して發展

し來つた、能藝の理想美たる、誠の花が實現する。かく、時分の花を單なる、時分の花として終らしめることなく、これを、誠の花たらしめるところに、彼の稽古の意義が存する。

今、十七八歳の項についての彼の所説を見るに、この期は少年期から壯年期への過渡期であつて、

先づ聲變りぬれば、第一の花失せたり。體も腰高になれば、風情^か失せて、過ぎし頃の、聲も盛り^りに、花やかに易かりし時分の移りに、手立てはたと變りぬれば氣を失ふ。

とある如く、少年期の身體的長所は年と共に失はれ、しかもこの年齢に於ける心理の常として、さういふ不調和な體格や變聲期の音聲等に對する、見物衆のをかしげな様子を感知して、強い羞恥心に捕へられ、自信を失つて、稽古が頓挫し停滯する。

かくて彼が、

この頃は餘りの大事にて稽古多からず。

といつた如き、根本的な懷疑と動搖に逢著する。然らば、この動搖期には如何に處すべきであるか。彼はいふ、

この頃の稽古には、たと指をさして人に笑はるゝとも、それをばかへりみず、内にては聲の届かん調子にて宵曉の聲をつかひ、心中には願力を起して、一期の堺今なりと、生涯にかけて能を捨てぬより外は稽古あるべからず。ここに捨つれば、そのまゝ能は止るべし。

と。即ち、單なる自然的純眞性に於てのみ存立し得てゐた少年期の美點は既に失はれ、壯年期に於ける新しい發展の曙光はまだ見出されないこの時期に對して、先づ、他人の批評を意

に介せず、ひたすら稽古に集中し、身體的には自然に隨順し、心理的には「一期の堺今なり」といふ如き必死の覺悟に立ち、生涯にかけて能を捨てぬ決定心を以て、齧りつき、押通せといつてゐるのである。何事にも、まづその意義と價値とを問はずに、手を著けることの出来ない青年期、しかも問はうとすればする程、手も足も出なくなつてしまふ青年期に對して、唯捨てぬの一語を以て、實踐による眞の解決の道を指示してゐるこの深い理解と指導者的力量には、まことに低頭せざるを得ないものがある。而して、かくの如き覺悟と忍耐と精進とを以て、即ち異常な意志力の發揮によつてこの過渡的な危機を押し切れば、そこには再び平坦な道が開け、二十四五から三十四五へかけての第二の順調期に入ることが出来るといふのが彼

の體驗であつた。

かくて彼の稽古は、その實踐に於て、一道集中の精神を以て全生活全生涯を規定するものであると共に、その心術に於ても、花鏡の「奥段」に、

花鏡
能樂傳書
世阿彌元清著

初心不可忘。時々初心不可忘。老後初心不可忘。

といつてゐる如く、自己の藝の進路に、常により高い藝位を見出してこれを新なる稽古の對象となし、それに對する初心者としての謙虚さと新しい意欲とを以て、不斷の發展に向かはんとするものである。彼が同じ「奥段」に、

命には終あり、能には果あるべからず。

といつてゐるのは、かくの如き精進の究る所に發せられた、道の無限に實參し得た人の深い歎に外ならぬ。世阿彌の如き

は、實に一道に徹することによつて普遍そのものに接し、永遠
そのものに参し得た、選ばれた人々の一人であつたといふべ
きであらう。

國語 卷十 終

昭和十二年六月三十日印刷
昭和十二年七月十四日訂正再版印刷
昭和十二年十二月十八日訂正再版發行

國語 全十卷
定價各冊金五拾五錢

(覆本製本) 2/1

版權
所有



編輯者 岩波編輯部

代表者 岩波茂雄

發行者 岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷者 白井赫太郎

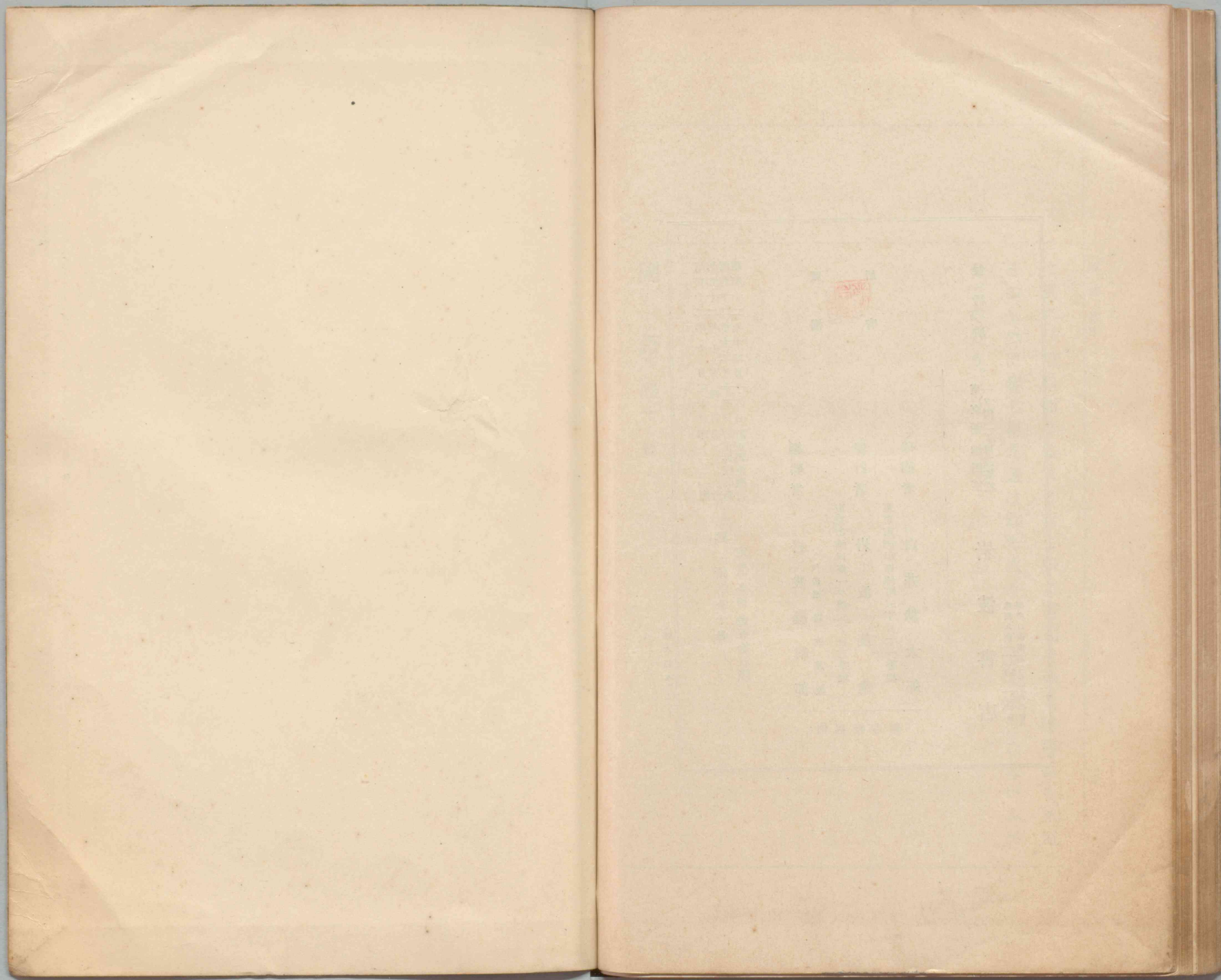
精興社印刷

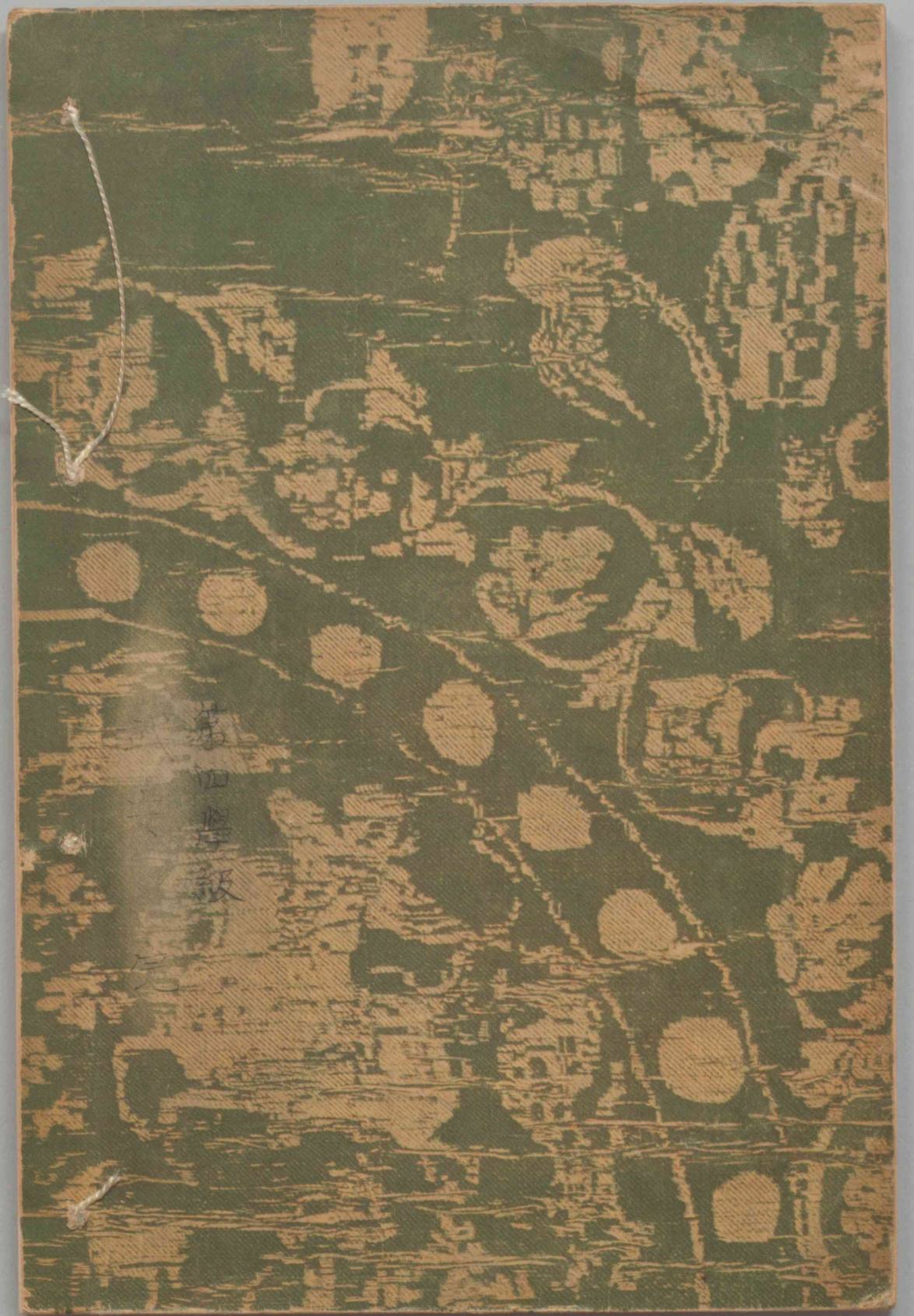
發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話九段一八七・一八八番
振替口座東京二六二四〇〇番





第四卷